
ひねくれ者の寄り道 inペルソナ 3

タレ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひねくれ者の寄り道 in ペルソナ3

【Nコード】

N0861V

【作者名】

タレ猫

【あらすじ】

1日は24時間ではない。1日には隠された時間、影時間がある。常人ならば元々、無い時間と認識される。だが、適正者は影時間に入る事が出来る。運が良い者は、【ペルソナ】と呼ばれる力を会得し、運が悪い者は、【シャドウ】と呼ばれる異形の化物に精神を喰われる。ここに、黒い肌を持ち、シャドウでもなく、人でもなく、ペルソナでもない少女が影時間に生まれ落ちたとすれば・・・物語はどう変化するのだろうか・・・この小説にはご都合主義、設定変更？&捏造、駄文&外道成分的なモノが入ってますので、嫌な人は

注意してくだされー、逆に仕方がない、見てやろっ！と言っ方は大歓迎ですよー

4月1日 黒い体になりました（前書き）

いや、その・・・P3Pやってたらつい熱が入って、それでイズミを【シャドウ】？

で出してみたいなあーと妄想してたら、気分転換に書いてみようか
と思って

書いてたら恐ろしいスピードで出来て・・・ええい！何故だあ！
？もう一つの

方はスランプ気味というか上手く書けないというのに・・・ぬああ！？

・・・いや、まあ・・・うん・・・とりあえず気分転換にこの小説を書いて
もう一つの方がスムーズに書けるようになりましたらこっちは
週1に

変更しますねー（スランプ状態だと逆になりますけど・・・

はぁ・・・何でこっちはパツと思いついて書けるのになあ・・・むう・・・

あ、ちなみにこの小説はちょっとP3のストーリーとか無視して自由
に行動する

のが多い？かもしれませんが、内容を弄るんじゃないって人は
注意してください！

今回の使用スキル：

ジオ：敵単体に電撃小ダメージ＋感電効果（判定10％）

4月1日 黒い体になりました

side:?????

4月1日 影時間

白と黒のタイルが敷かれた床、大人の高さ程ある金の時計、何より目を引く物が中央にある階段の先、豪華な装飾の大きな時計に穴を開けて出来た入り口らしき場所・普通に見れば、おかしい風景のその場所に黒髪の少女が倒れていた

「ん・・・んん？・・・んー・・・夢なのかなー？僕の部屋でもないし見覚えもないし・・・誘拐でもされたのかな？に、しても眩しい・・・ってあれ？」

天井を見上げれば、太陽でも吊るしてあるかのように眩しい光に天井が
見えなくて、つい手で目を隠そうとすると・・・影になっているとはいえ真っ黒な手が見えた

「ああ、僕って黒人・・・じゃなくて日本人だよなー、何で肌がこんなに黒いんだろ？
あれ？体も・・・？え、足も？もしかして全身？うつわー・・・日焼けでもないよね・・・？
こんな時は落ち着いて状況判断？が大事って聞いたような・・・僕は起きる前に・・・」

腕が日焼けというレベルではなく、絵の具の黒を塗りたくったように真っ黒な自分の腕を見て、少し目を見開いたがのんびりした口調は変わらず、視線を下にずらして体と足を
見ても腕と同じく真っ黒だった・・・そして自分が起きる前のことを思い出そうとするも・・・

「僕が起きる前は・・・思い出せない・・・？何か頭に霞がかかっているように

ボヤけてるし・・・僕は・・・名前・・・え？名前も？記憶喪失？・・・はあ・・・面倒だなあ」

自分の名前すらも思い出せない状況で、見知らぬ場所にいるというのに少女は心底
めんどくさそうに溜息をついて、スクリと立ち上がった

（・・・？普通なら慌てるのが普通だよーって僕の知識？がそう考えるんだけど

何だか面倒だなーとしか感じないなあ・・・僕って記憶を失う前もこんな感じなのかな？）

常人ならば混乱して慌てふためくのが普通だと、自分の頭に残る微かな知識が

そうだと言っているのに対して、少女は首を傾げながらも辺りを見渡した

「まあいいやーそれよりもどっちへ行こうかな？・・・階段を登って大きな時計？の門を

潜り抜けるか、それとも逆の通路を進むべきか・・・まあ、通路の方だよね」

パンパンと腰についた砂埃を叩いて、左右を見渡すと薄暗い通路を進む方を選んだ

とりあえず、ここから出ようと考えた少女は建物の上を目指す階段よりも、通路の方が

出口に通じている可能性が高いか？と考えた結果でもあったり

「・・・う・・・何かこの通路も薄暗い・・・あ、出口？おー、やっぱり当たってたんだー

でも、この姿じゃ変に思われるだろうし、どうしよ・・・はい？」

テクテクと歩いていった少女が薄暗い通路を進んだ先に、暗い光だが明るい場所がある

ことが分かると、少し小走りに外へと出た・・・が、確かに外へは出たが少女が知っている

世界ではなかった、空は緑色に染まり、遠目に家やビルが見えるが電気がついておらず

何より、頭上に浮かぶ目を見開く程の大きな金色の月と振り返ると積み木を乱暴に積み重ねた

ような、歪な建物が建っていた

（・・・これ、もう夢じゃないの？・・・いたたたっ！いやいやいや！これは

さすがに驚くよ！？記憶は無くしてるようだけど、夜だと空が黒かったはずだし、電気は

ついてはずだし、あんな大きな月は無いし、こんなバランス悪くて趣味も悪い建物なんて

見たことないって！！・・・ああ・・・もう頭が痛くなってきた・・・とりあえず人がいる場所へ）

もう夢であつて欲しいと願いつつ頬を思いつきり抓つて、涙目になつた黒髪の少女は人を探そうと歩き出すと学校に置いてありそうな、横にスライドする門をよじ登つて地面へ着地し、ふと門の横にある表札に目が止まつた

【私立 月光館学園】

（・・・あれ？何だか見覚えがある名前のような・・・？あー、もう！思い出せないって何だかイライラして嫌だなあ・・・はあ・・・っていうかこれが学校？悪趣味だなあ・・・）

少女がうわあ・・・と、短く呟いてもう一度、積み木を重ねたかのような今にも崩れそうな建物を見て、何か高いからビル？っぽいなーと思いつつもその場を離れた

道に沿つて歩く内に・・・途中で血の池の上に立っている大人程の大きさの棺があつたけど、無視した・・・他にもいくつも点々として棺を立たせて置かれてあつたり

「絶対、違うよね・・・僕がいた所はこんな棺桶みたいな棺は無いし、血の池なんて無いし・・・ちよつと調べてみようかな・・・？何だかおもしろそうだしねーあははー」

気丈に振舞っているだけなのか、ニタリと歪に笑うと血の池へと近づいて覗き込んだ

「・・・あれ？鉄臭くない・・・？血じゃないのかな？舐める気は無いけど・・・あー

予想はしてたけど、やっぱり顔も真っ黒・・・目はそのままかあー黒目の方が良かったんだけど」

血の池に近づくと、血の独特の鉄臭い臭いはなく、ただの水溜り？が血の色に

染まっているだけなのかな？と、考えつつも自分の顔を確認すると、やはり真っ黒な

肌の色に染まっているが、その目は赤く、小柄な体つきをしている為か、顔も小さく

整っており、愛らしい顔つきで傍目から見れば人形が動いているかのようだった

（生まれつき目が赤いから・・・んー？思い出せないけど苦労した思い出があるような・・・？）

後もう少しで思い出せそうな記憶・・・だというのに、思い出せない事にもはや諦めたのか

溜息をつくと、再びスタスタと歩き出し・・・しばらく歩き続けると駅前広場に出た

「おおー、こちら辺は見覚えがある気がするー・・・こんな薄暗くて空が緑色じゃない

けどさー、電気・・・ついてないよね？人の気配もない・・・え？」

広場の先の階段を登れば改札口が見えるが、電気が通っていないのか灯りもついておらず

駅前だというのに駅員や人が一人もおらず、あるのは棺が点々とあるだけ、辺りを確認して
途方に暮れる・・・かと思いきや駅から少し離れた細い路地に黒い影が走っていくのが見えた

（人・・・？んー、手がかりも何も無いし・・・変な人だったら面倒だから武器とかないかな？
って武器になるようなもの・・・あ、この看板は使え・・・うつ・・・少し重いけど仕方ないよねー）

念の為に、武器は無いかとキョロキョロと辺りを見渡すと、ベンチとゴミ箱ぐらいしか
見当たらず、仕方がないと近くにあった花屋さんの前に置かれている看板を抱えた

【花屋 ラフレシ屋】と書いてあったので、花屋と分かったが店名はどうかと思ったが・・・

「うー・・・木で出来ているし手頃な大きさだから持ち運び？しやす
い方だけど

鉄パイプとかあったら楽な『う、うわあああああああ！！！！』」

少し小走りに更に薄暗い駅から離れた路地へと入った瞬間に、若い男らしき悲鳴が

聞こえ、一瞬ビクリと体を震わせたが、声が聞こえた方向へ忍び足で壁越しに覗き込んだ

グチヨ・・・グチヨリ・・・

耳に残る粘着質な音と共に視線の先に黒い塊のナニカが、うつすらとだが下から

伸びる肌色の手が見え、黒いナニカに襲われているのが見えた

（・・・ああ、あの手は人の手だねー肌色だし・・・って何あれ！？明らかにお化け

だよね！？んー・・・情報が欲しいけど、僕では勝てなさそうだから諦めようかなー

うんうん、自分が大事だよねー？これが普通だよねー・・・あ、目が合っちゃった・・・）

少女が襲われている青年を見捨てて、来た道へ戻ろうとすると

目が合った？かは分らないが、突然その絵の具の黒を泥団子に塗りたくったような

物体からニョキりと生えた手の先に青い仮面を持ち、その青い仮面の目の部分にある穴から

覗かれたような気がして、つい引きつった笑みで壁から顔を覗かせた状態で手を振った

・・・すると、相手も答えるかのように無数の手を出し、ジャキリッ！！とその無数の

黒い手の先に大きな針や剣を持ってガチャガチャと不快な音を出しながら少女へと走り出した

「えええ！？僕を食べても美味しくないよ！！さっきの男の人を食べてればいいじゃない！」

足が無く、スライムのように地面にへばりついているかのような姿勢だというのに

無数の腕の何本かで体を動かすと、かなり速いスピードで迫ってきた

「っ・・・！！・・・こんなの持ってたら駄目だよ・・・ねっ！！！！」

よーし！当たっ・・・ごめん！もうしないから怒らないでー！ほら！
肌黒いし仲間じゃない！？」

勢い良く、咄嗟の判断で逃げるのに邪魔になるであろう木の看板を
思いつきり黒い

ナニカに投げると、ゴツ！！と鈍い音を立てて一瞬怯んだが、すぐ
にガチャガチャと

刃物を振り回しながら追いかけてきた・・・慌てて謝りながら髪を振
り乱して逃げる少女

・・・ただ、同じく真っ黒な肌同士、仲間と誤解してくれないものと
と期待したが無駄であった

「ああー・・・僕って・・・はあはあ・・・運動は・・・苦手だったような
気が・・・ゲホッ

するんだけどさー・・・もう別に死んでも何も感じないだけだから楽
でいいよねー諦めようかな」

どこか他人事のように、心に一切の恐怖の感情が無く、むしろ面倒
だから楽にしてくれる

なら、してもらった方が・・・と、普通なら考えないようなことを考
えていると

いつのまにかかなり走っていたのか、あの横のスライド式の校門が
見えた

「ふう・・・よいしょっ痛い！？・・・殺すなら楽に殺してくれた方が
いいのに！！」

校門をよじ登ろうとした所で追いついた黒いナニカが無数の手を振
り回し

持っていた剣先が少女の右足を薄く斬りつけ、少女が呻いたがすで

に門の先へ着地していた

ガン！・・・ガングアン！！・・・ガチャガチャ・・・

「あー、やっぱり登ってくるよねえ・・・痛い殺され方は嫌だから逃げようー

誰か助け・・・助け？僕に・・・？・・・僕に・・・助けなんて・・・
・あれ？」

何度か持っていた剣や大きな針で校門を叩いていたが、無駄だと悟ったのかよじ登ってくると

少女が再び走り出して、助けを呼ばうと声を出そうとしたが途中で声が詰まり

・・・一つだけ・・・一つだけ記憶には無いが、確信できる事実が心に浮かんだ

そのまま息を切らせながら、あの大きな時計の門がある広間に出て、急いで階段の下へと

隠れた・・・前からしか見てなくて分からなかったが階段は宙に浮いてある状態にあり

その入り口から見れば死角となっている場所へ息を殺していると・・・

カチャ・・・カチャカチャ・・・カチャカチャカチャ

あの無数の剣と大きな針が出す不快な音の位置から、広場の入り口まで来たことが

分かったが、少女はそんな事には気づいてはいなかった・・・

（そうだ、誰も助けしてくれない・・・誰も・・・！！一度も・・・誰も助けてくれなかった！

それだけは確信できる！いつだって自分を助けたのは自分だけ・・・！！！）

ギリツと歯を噛み締める音がし、怒りに染まった表情になっている少女・・・だが

少女は足を怪我しており、逃げる際にも血痕が点々と残っており・・・結果・・・

カチャ・・・スウ・・・ガンツ！！

不意に血痕を辿ってきた黒いナニカが蹲っている少女へと剣を振り下ろすが、寸前に少女が横へ転がって回避し・・・その怒りの形相を黒いナニカへと向けた

「ああそうさ！！いつだってどんな時だって誰も助けてくれない！！君が僕を殺すというなら・・・ボクだって・・・キミを・・・コロシテイイヨネ？」

ぞわりっ・・・と、辺りの雰囲気が変わり、爛々と光る赤い目が喜びに歪み

口元もニタァ・・・と、笑い・・・狂喜に染まったその表情を見て黒いナニカは

本能的にその狂気に、殺意に怯えて慌てふためきだした

その動揺を見逃さず、少女が一息に黒いナニカの目前まで迫ると、無数の手の先の一つ

・・・剣の刀身を素手で掴むと、血がダラダラと流れており、痛みもひどいはずだというのに

狂喜の笑みを浮かべながら、勢い良く剣をもぎ取ると黒いナニカの

液体状の体へと振り下ろした

《キャ、キャアアアア！？》

甲高い悲鳴をあげながら悶えつつも、勢い良く他の持っていた針や剣を振り回し

イズミを乱暴に放り投げると、黒いナニカが勢い良く元来た道へと逃げ出そうとするも・・

バチ・・バチバチッ！

（相手を殺そうとして・・自分が殺されようとしたら逃げるの？そんなの許さない・・！！）

逃げ出した相手に対する怒りに答えるかのように、少女の全身にバチバチと音を立てて

電流が走っていた・・少女はそんな事には気がついてはいない、ただ自然に・・

本能の赴くままに・・口を開いた

「言ったよねえ！？コロシテモイイッテ！！・・【ジオ！！】」

チュンッ・・バリバリバリッ！

少女が黒いナニカに掌を向けると、その先から一筋の電流が流れ、黒いナニカに

当たると黒いナニカの全身を電流が駆け巡る・・しかし、それでも死なないのか

今だにピクピクと動いてはいるが、ビリビリと震えていることから感電しているのだろう

そこで見逃す訳もなく、ゆっくりとした足取りで少女が近づき、黒いナニカを踏みつけると

「許して欲しい？助けて欲しい？逃がして欲しい？・・・残念、誰も助けてくれない・・・

助けてくれるのは・・・自分だけだよ？あははー！！」

笑みを浮かべながら刀身を掴んでいる為に、自身の血で塗れた剣を無慈悲に振り下ろし・・・ビクリ！とその黒いナニカの体が震えてそのまま絶命するかと思いきや少女が突然その体に食らいついた

（っ！？なん・・・で？体が勝手・・・あ、これ味は無いけどコンニャクみたいで喉越しいいね）

グチュツ・・・ジュルツ・・・

黒いナニカがビクビクツ！！と、少女に噛み付かれる度に震え・・・何度か噛み付かれた後にその体が黒い霧となって消滅した・・・その際にその黒い霧が少女の体に吸い込まれた

（うわっ！？・・・何かお腹の中に溜まったような・・・え？大丈夫なのかな？これ・・・ん？）

シャドウ：LV2

アルカナ：魔術師

名称：臆病のマーヤ

HP：42 SP：13

スキル：ブフ

耐性：火・雷・風弱点

もぞもぞと腹部に痒いような、何かが蠢くような感覚を感じた後に突然、頭に浮かんだ言葉に？？と、首を傾げていた少女だが聞き慣れない単語などに混乱していたが、思考を止めた

（えーと、シャドウとかアルカナ？とかは分からないけど、名称：臆病のマーヤ
つてのはさっきの黒いナニカの名前かな？・・LVって・・そんなゲームじゃあるまいし）

ふう・・と、溜息をついてカランと無意識の内に手放した剣を見て、右手に強い痛みを

感じた・・が、眉を顰めただけで、すぐに無表情へと変わった

「痛みは・・慣れてる・・？あー！もう！！自分の事は分からないし訳の

分からないお化けは出るし・・！！体は勝手に動いて気持ち悪いのに噛み付くし！！

・・あ！！それに体から電気が出るしで・・イライラするなあもう！！・・つとと！！」

体が覚えているのか、これくらいの痛みは大丈夫・・と、無意識の内に

心で思ったことに痛み慣れていいのか？との疑問も浮かび、様々な不可思議な出来事に頭を抱えて唸っていると、急に眩暈を感じた

（あ・・かなり疲れた・・ね・・少し眠ろう・・かな？ここって安全・・なの・・かな？）

フラフラと意識が薄れていくのを感じて、疲労の為かバタリと勢い良く倒れると
そのまま意識を手放し、すうすう・・・と可愛らしい寝息が聞こえてきた

・・・数分もすると、床にある大人程の大きさの金色の時計の隣にすう・・・と

音もなく青い扉が現れ・・・ガチャリと音を立てて開くと、中から銀髪のおレンジ色の瞳の女性が茶色の分厚い本を抱えながら、倒れている少女へと近寄った

「これは・・・なるほど、この方もまた興味深い・・・失礼ながら御体に触れることを
お許しく下さい・・・それでは、参りましょう・・・ここは、少々危険ですから・・・」

少女の黒い体を見ても、薄く目を細めてクスクスと笑みを浮かべるだけだったが

スルリと、倒れている少女の頭と体に両腕で支え、持ち上げるとスタスタと元来た

青い扉へと連れていき・・・後には静寂に満ちた広間だけが残った

4月1日 黒い体になりました（後書き）

Q P3Pってもう古くないっすか？

A、ま、まだだ！まだ終わっては！・・まあ、またハマツたんですよー（猫が

何やら久しぶりにプレイしたので、設定とかうつすら覚えてる程度で・・変な所があったら言ってくだせえー

4月3日 鼻が長い人とエレベーターガールの人（前書き）

・あれ？何この書くスピード・・・めっちゃスムーズに書けたんですけど・・・

いや、まあ・・・良いんですけどね？うん・・・何ていうか途中で燃え尽きそう・・・

えー、今回は・・・ちょっとオリジナル設定？とかチラホラ出ると思いますー

最初だから説明が長いなあ・・・猫的にはちゃちゃっと進めて落ち着きたいのに・・・

んー、纏めて読んでねー？的な感じで設定集とか追加しようかな・・・？

■今回の使用スキル■

吸収：瀕死のシャドウやHPを削り切り、消滅して黒い煙となった瞬間に使用可能

相手のシャドウを自身に取り込む、但し自分よりLVが高い場合ダメージを受ける（SP1消費）

4月3日 鼻が長い人とエレベーターガールの人

side:?????

ゴウンゴウンゴウン・・・

どこか機械的な音が聞こえ、ゆっくりと黒髪の少女が目を開けると青い部屋・・・いや、部屋のように広い大型エレベーターの中にいる事に慌てて

飛び起きると、イスに座っていたのか、そのまま後ろへとこけてしまった

「あいたたた・・・あれ？夢から覚めたの？・・・あ、まだ黒い体のままだし

・・・それに何だか鼻が長いお化けがいるんだけど・・・え？食べられるの？」

僕が起き上がってイスを直すと、対面に青いソファーに座る童話のピノキオのように

鼻が長い老人が引き攣った笑みを浮かべ、隣にいる銀髪のショートカットの女性は薄笑いを

浮かべていた

「よ、ようこそ・・・ベルベツトルーム」へ。私の名は、イゴール・・・お初にお目にかかります。こちらはエリザベス、同じくこの住人だ。」

左手を顎に添えながら部屋に響き渡る声で、自身の名と隣にいる女性を紹介するも

先程の少女の言葉に引き攣った笑みのまま話していた

すると、隣にいた銀髪のショートカットの女性が一步前へと進み出た

「エリザベスでございます。お見知り置きを・・・ふふっ」

銀髪の女性・・・エリザベスが少女が先程からイゴールの長い鼻を凝視している

事に視線から気づき、つい薄く笑ってしまつと、イゴールから少し恨めしげに睨み付けられた

服装は、部屋と同じ色の青い服で目のような模様が入っており、エレベーターガールにも見える

「さて、本題に入りましょう・・・本来ならば、このベルベツトルムは

”契約”を成された方のみが入れる部屋・・・けれど、貴方は契約を成されていない

いえ、本来ならば貴方のような”存在”が生まれること自体が、私共も予測不可能でございました」

イゴールの目が怪しく光り、興味深そうに自分を見ている事が分かった

自分がどんな”存在”なのか、自分が知らないのにイゴールが知っているのだろうか？

と、考えつつ首を傾げているとイゴールが薄く微笑んだ

「貴方は人ではありません、されどシャドウでもなく、ペルソナでもありません

貴方が何者か・・・そして、この塔で貴方が生まれた意味・・・私共はその答えが知りたい

のです、貴方がこの書類に契約をしてくださるのであれば、私共は貴方のお力添えとなりましょう」

（ふうーん、用は珍しいから観察させて欲しいって事ねーあははー性格悪いねー

性格悪い方が僕的には好きだけどねー・・あれ？そっいえば右手の傷が治ってる・・？）

すう・・と、これまた円形の青いテーブルに一枚の書類とペンが差し出され

イゴール達を警戒しながらも、差し出された書類を見つめたが、その際に右の掌を

見たが、抜き身の刀身を素手で掴んで血がダラダラと流れたのにも関わらず、綺麗な

掌が見え、不思議に思いつつもひとまず目の前の書類をじっと見つめた

”我、自ら選び取りし、いかなる結末も受け入れん”

短く一文だけ書いてある書類に自分の名前を書く欄があった

「んー、貴方達は色々と情報を持ってそうだし、観察したいっ！って本人の前で

キツパリ言える所とかおもしろいから良いよー、ただ・・この書類で言う事があるんだけど

1、僕は名前を覚えていない 2、この書類の内容は自分で選んだ事は後悔せずに受け入れ

るんだよー？って事でいいの？・・・その結末を覆しては駄目な

の？」

ケラケラと少女が楽しそうに笑いながら、尋ねるとイゴールの目が探るような視線に変わった

「・・・いえ、貴方はもう名前を思い出せるはずです・・・それに、結末を覆す時点でそれはもはや結末ではありません、貴方が望むがままに行動してくれて構いませんよ」

しわがれた声で、返答をするイゴールに嘘がないかと、先程から少女はイゴールの目を見つめていたが・・・不意に考え込むように目を閉じた

（ふうん・・・？もう名前を思い出せる・・・？・・・遠藤・・・泉・・・イズミ・・・そうこれが

僕の名前・・・さっきまで、思い出せないと僕自身が思い込んでいたのにどうして知っている？）

僕が訝しげにイゴールを見つめると、スッ・・・と、何か薄いカードのような物をテーブルに差し出してきたので、受け取ると・・・

遠藤 泉 【エンドウ イズミ】

????? LV 2

アルカナ：死神

HP：92 SP：54

スキル：ジオ・ディア・突撃・吸収

耐性：光&闇無効

すう・・・と、頭に不思議な文字が浮かび、脳に文字が吸い込まれるかのように違和感なく記憶した・・・余りに理解不可能な出来事にますます警戒を強めると・・・

「貴方のことは失礼ながら少々、調べさせて頂きました・・・ああ、いえ体に

触れたりなどはしておりません、貴方に話すべき事は多すぎますので、どうぞ

気を楽に・・・それでは、貴方の目標・・・それはLVを上げることです。貴方の今の

状態は大変不安定な状況にあります・・・健全なる精神は健全なる肉体に宿る・・・

貴方の肉体が強くなれば、同時に精神や魂も強化され不安定な状態から安定した

状態へ移り、記憶も段々と蘇り最後にはこの影時間から抜け出せるものと思われます・・・」

調べたとの答えに、思わず（え？この年でも体は無闇に触つ）と、思った所で

イゴールが察したのか先に答え、話し終わると僕の出方を待っているのか何もいわずに

静かにこちらを見つめていた

（影時間？・・・あの気味の悪い世界のこと・・・？このままだとあそこから

元の世界へ戻れない・・・と？・・・はあ・・・他に頼りになりそうな人もいないし・・・ほいっと）

サラサラと、突然書き出した僕を見て、後ろにいたエリザベスもし興味深そうに

見ている中、書き終わるとイゴールの前へと書類を押し出した

「分かった、君達は僕を観察する、僕は見返りに情報とあの気味の悪い世界からの脱出方法を

教えて欲しい、・・・あ、ちなみ僕の事はイズミって呼び捨てにしてくれて構わないよー

・・・さて、それじゃあ色々と聞きたい事があるよ・・・契約までしたんだから長いよ？あははー！」

僕がニタリと人が見れば、寒気がする笑みを浮かべたが、イゴールは苦笑し

「分かりました、話せる事であればお答えしましょう・・・」と、長い鼻なのに

不敵な笑みを浮かべていたので、少しかっこいいなーと思ってしまった

イゴールと数十分ほど話し込むと、僕を気遣ってか少し休憩しましょうと

エリザベスがどこからともなく、紅茶を差し出してきた

「・・・へー、紅茶ってあんまり飲んだことないけどおいしいねー啊りがとねー

エリザベス・・・さて、と・・・それじゃあ僕はシャドウ？を倒して取り込んでくるよ」

僕がお礼を言うと、薄く微笑んで返した事に大人の女性だなーと、少し懂れるなーと

羨望の眼差しで見つめていると、照れているのかそそくさと少し顔を赤くして紅茶を下げていた

僕が受けた説明は後々に復唱するなりして、確認するけど・・・僕がいた積み木のような

建物・・・いや、塔らしんだけど名前が【タルタロス】・・・一瞬、タルタルソース？の冗談だと

思ったけど、イゴールが真剣な表情で話しているが為に・・・プツと笑ってしまうと眉を顰めた

ので、慌てて姿勢を正して聞いてたけど・・・この塔の謎を解くのも僕の運命に定められている

と言われたんだけど・・・え？運命とか見れるの？それなら答え教えてよーと言ったけど

さりげなく断られた・・・自分達も詳細までは知らないということらしい

「さーで、ここがエントランス？らしいんだけどさータルタロスの入り口らしいんだけど

・・・ここで力を試してみようかな・・・おいで、【臆病のマーヤ】

ー

ゾルリと、僕の影からオドオドして周りを見渡す、あの黒い塊が青い仮面を

辺りに動かして、怯えていた・・・僕にはシャドウを取り込み、シャドウを操る事が

出来るらしい・・・そもそも、シャドウとは人の支配から逃れた精神であると教えられた

人の支配から逃れた精神はシャドウとなり、他の人を襲い精神を喰らうお化けとなるらしい

・ シヤドウは人の支配から逃れた際に個性を失い、アルカナに基づいた仮面と形態をとると

聞かされた、逆にペルソナとはシヤドウを飼い慣らし、意のままに制御し、操る事が出来る者

をペルソナ使いと言うらしい、ペルソナは人に制御されている為に個性が失なわれず、決まった

形を取るらしい、用はシヤドウを制御できる者はペルソナ、制御できない者はシヤドウ

と、区別でき・僕はシヤドウの性質に近いはずなのに自我と個性がある時点ですでに

シヤドウではなく、人でもなく、かといってペルソナでもないナニカ・と、イゴールも

頭を悩ませていたけど・うん、まあ・

「僕はシヤドウに近い？からか、シヤドウを取り込んで自分の意のままに操れるらしいんだけど

本来は他人の精神のものだし、しかも個性がつけられないからシヤドウの形のまもらしいん

だけどさー・・・この子、プニプニして可愛いから別にこのままでもいいやー」

キュウキュウと鳴いて擦り寄ってくる【臆病のマーヤ】の黒い体がスライムのように

プニプニして気持ち良いから抱っこして移動している・何だか凄く軽いんだけど

他にも【同化】とか【生贄合体】とか教えられたけど・使う時が来れば思い出せばいいやー

エントランス・最初に目覚めた場所の中央にある階段を登り、大

きな金時計の門を

潜り抜けると、中は緑色の通路に所々に、血の池のような水溜り・
そして

ゾクリと空気が変わった、ピリピリとした緊張感漂う雰囲気・・た
だ、その殺伐とした

雰囲気の中どこかウキウキと楽しそうに笑うイズミがいた

「よし、さっきエリザベスから貰った釘バット・・何で持ってた
んだろ？」

・・とりあえず、持ってと・・最初は1Fを探索して緑色？の脱出
装置があるから

それで脱出して戻ってくることに、絶対に一つの階層に長くいすぎな
い事、黒い影がシャドウ

だから、後ろから不意打ちして殴ること、相手によって弱点の属性
があることを覚えること！」

うん、イゴールとエリザベスが教えてくれた事を守ればよほどの事
が無い限り大丈夫らしい

けど・・よし、行こうかな！【臆病のマーヤ】もオドオドしてない
で戦ってねー？

・
僕がちよこんと床に降ろすと、オロオロしながらも後ろをついてきて
釘バットを両手で掴みつつも足音を忍ばせて、壁際から覗き込むと・

ズル・・ズルル・・

黒い泥団子のような塊が緑色にうつすら染まる暗い通路になってい
た、動き自体は遅く

緊張で汗ばむ手を無視して釘バットを握り締め・・シャドウが向こ

うを向いた瞬間に・

（よし、チャンスだ！……えいつ！）

タタタツ・と、通路に走る音が聞こえ、慌ててシャドウが振り向くも時すでに遅く

不意打ちが成功し、釘バットを叩きつけるとシャドウが驚いてバランスを崩した

「あれ？驚いてダウンした？よし！一斉に仕留めるよ！」

僕が思いっきり釘バットを振り被り何度も立ち上がろうとする、シャドウ【臆病のマーヤ】

・…うん、僕の隣で容赦なく同じ姿のシャドウ相手に容赦なく剣で滅多切りにしてる

のと同じ種類のシャドウだね……ザシュザシュググチヤツ……容赦ないね

イズミが苦笑しつつも自身の手を緩めることなく、釘バットを振り下ろしていると

敵シャドウ【臆病のマーヤ】が、黒い霧となって消滅……する所でイズミが掌を前に出した

「よし、スキルの発動は頭に思い浮かべて言葉？を言うんだっけ？
【吸収！】」

スウウ・と、音を立ててイズミの体へ黒い霧が吸い込まれると新たにシャドウが自分の体の中へ入ったことを感じて、頭に【臆病のマーヤ】のスキルや

能力値、弱点や耐性などが記されていた

（はあ・・・この弱点とか耐性が厄介なんだよねえ・・・えーと、全ての攻撃には

攻撃属性があつて・・・例えば剣で攻撃なら斬撃、弓や槍なら貫通、拳とか鈍器なら打撃

・普通の攻撃で3つあつて、魔法とか入れたら火、氷、風、雷、闇、光とか色々ある

んだよねえ・・・覚えるの面倒だ・・・だけど、覚える事が出来たらシヤドウによつては

その属性が弱点の攻撃を当てるとダウンしてしばらく動けなくなるらしいんだよねー

逆に、無効や耐性持ちやその属性の攻撃を反射したり、自身の体力を回復する吸収なんて

その属性の耐性を持つてる敵もいるから要注意だつて言われたけど・・・色々試すしかないみたい)

何だか覚えるのが不便だなー、と思いつつも僕的能力には弱点があつて僕よりレベルの

上のシヤドウは操れない・・・出した瞬間に暴れだして襲い掛かってくるらしいから相手より

上のレベルになる必要があるらしいんだけどさー・・・でも、何だか楽しいからいいやー

自身が死ぬかもしれないという状況であっても、むしろ死すら楽しむかのように

笑いながら、1Fを走り回り先程のように、後ろから不意打ちをしては危なげなく

勝利し、何故か【臆病のマーヤ】しかおらず、合計6体まで吸収すると満腹感？を

急に感じて、イゴールの言葉を思い出し『今の貴方では、6体のシ

ヤドウを所持するのが

限界でしょう』との言葉を思い出して、素直に引き上げようと走り回っている内に見かけた

階段のすぐ近くにあった緑色に光る機械らしき物の傍に寄り、触れると辺り一面に光りが溢れた

「っ・・・うー・・・あれ？おおー、本当に戻ってる凄いなあ・・・」

緑色の閃光が眩しくて、目を瞑りながら唸っていたが目を開けるとエントランスにいた事に

うんうん、と唸りながら装置の不思議さに驚いていたが、スタスタと金時計の横にある

青い扉の前に立ち、イゴールから貰った”契約者の鍵”を使って中へと入った

「ただいまー！とりあえず、6体まで取り込んだよーこれで生贄合体が

出来るんだよね？・・・あ、エリザベスー紅茶お願いねー」

ニコニコと笑顔で入ってきたイズミに、この突然の環境の変化に適応している

イズミを更に興味深そうに見つめるイゴールと言われた通りに微笑みながら

紅茶を用意するエリザベスがいた

・・・だが、影時間は1日の内の僅かな時間であり、24時間＋影時間・・・影時間内に

取り残されたイズミは、一日が過ぎるのが早いことに気がつくのは・

・まだ先の話

4月3日 影時間 終了

4月4日 影時間 突入

4月3日 鼻が長い人とエレベーターガールの人（後書き）

Q え？結局・・・正体って何なの？

A、・・・ま、まあ・・・一応考えてはいるんですけどねー・・・何か自分でも

変だなーとは思っただけでまじなことを考えねば・・・むう・・・

何やらベルベートルームぐらいしか安全地帯が思いつかなくて
ちよっと強引に入れてもらったんですけどねー・・・あの鼻はど
うなっているんだ？

耐性が光&闇無効の理由は味方がシャドウだし、一撃死の技が多い
光と闇が

弱点だったりしたら・・・即、BAD ENDになるかなあー
と・・・

人物紹介&設定集（前書き）

えー、分かりやすい？ように一応はちょこつと纏めたものですー

重要人物？とかは書いていこう？かなーと思いますよー

・・まあ、今の所は設定とかまだ書いてないんですけどね・・

人物紹介&設定集

名称：遠藤 泉 エンドウ イズミ

身長：142cm

体重：42kg

容姿：漆黒の腰まで伸びるロング 頭にチョコンと束でアホ毛がつている（触るとなぜか怒りっぽくなる） 目は血塗られたように紅い瞳である 背が小さいくせに体型に無駄がなく出る所はしっかりと出ていたりロリ巨乳の属性持ち 無表情でいれば美しい容姿が為に初見の人は息を呑む程である、ただし眠そうにしていたりだにかけていたりすると途端に小動物の可愛さに移り変わりギャップがひどく撃沈する人がいたりいなかったり

：狂喜の笑みを浮かべていたりする時は、逆にその容姿と相まって恐ろしさが増加したり

性別：女

性格：天然、動物好き、ひねくれ者、人間嫌い、怠け者

特技&能力：影使い シャドウマスター

シャドウを支配、操作できる能力、自身がシャドウに近い性質を持つが為に個性を付け加えられず

ペルソナとして確固たる能力と外見を与えられずにシャドウとしてのスキルと外見のまま操る

操っている対象のシャドウに五感を付与できるが、複数に付与すれば膨大な情報に

脳の処理が追いつかず、ひどい頭痛になる・・・良く見ないと分からないが実はシャドウの
アルカナを示す仮面に小さく マークがついていたり・・・

デメリット：自身よりもＬＶが高いシャドウを内に取り込むと腹痛のような症状が出たり、出すと命令に感じなかったり、ＬＶ差がひどいと逆に襲い掛かってくる

【同化】

そのシャドウのＬＶや能力値の大きさに応じて自身の能力値を増やすことが出来る

ただし、ＬＶが自身よりも低いシャドウに限り、そのシャドウが持っているスキルも扱えるようになる

デメリット：そのシャドウ特有の姿を受け継いだ形になる、例えば・

【臆病のマーヤ】＋【イズミ】・・・背中から無数の手が生えた触手人間・・・とか？

【寝ることB】 立ったまま寝ることが出来る程度の能力

【感情感知】 目を見れば、相手がどのような感情を抱いているかが理解できる

ただし良い感情「親しみや愛情などの感情は読み取りにくい」

逆に「嫌っていたり、憎しみ、怒り、悲しみ、欲望、恐怖」など負

の感情は即座に感知する

詳細：幼少の頃のある出来事により深い人間不信に陥りその悩みを誰にも言わずに抱えたまま

時が過ぎた結果、中学１年の時に感情をあまり持たなくなり、ふと気がつけば相手の目を見れば

ある程度の感情が分かる事に気がついた（感情感知）負の感情は嫌という程に浴びたせい

感知能力は高いのでよく当たり、負の感情だけは当たると確信している

それと同時に性格自体も歪み、自分に向けてくる負の感情を楽しむ時もしくは他人が不幸に陥っている状況を見ると気分が高揚する

自分に優しくしてくれたりする人にはコッソリ恩返しをする

ただしこれは自分がしないと気持ち悪いという理由だったりする

子供と動物には案外優しくする（子供は純粋な子のみ）その際は作り笑顔をするが

そのままにしておくのと貼りついたままになり戻すのが大変になる

第２話終了時点のステータス

遠藤 泉【エンドウ イズミ】

????? L V 3

アルカナ：死神

HP 100 SP 58

スキル：ジオ・ディア・突撃・吸収

耐性：光&闇無効

■スキル紹介■

ジオ：敵単体に電撃小ダメージ＋感電効果（成功確立１０％）（

SP4消費)

ディア：味方単体のHPを小回復（SP4消費）

突撃：敵単体に打撃ダメージ（HP7消費）

吸収：瀕死のシャドウやHPを削り切り、消滅して黒い煙となった瞬間に使用可能

相手のシャドウを自身に取り込む、但し自分よりLVが高い場合ダメージを受ける（SP1消費）

■設定集■

タルタルソース・・・いや、タルタロスやら攻撃属性とか何だけど・・・

・・・ここら辺は後で書きます・・・ちょっと変に度忘れしてたりして・・・
うん・・・

4月4日 初めての番人戦（強敵シャドウ）（前書き）

っはぁー・・・省略しようと思って書いたけど分かり難くなったり細かく書いたら字数が・・・むむむ・・・

まあ、変な所があったら言ってくれたら嬉しいですよー

■今日の使用スキル■

アギ：敵単体に火炎小ダメージ

ブフ：敵単体に氷結小ダメージ＋氷結効果（判定10％）

ガル：敵単体に疾風小ダメージ

マハガル：敵全体に疾風小ダメージ

ジオ：敵単体に電撃小ダメージ＋感電効果（成功確立10％）

ディア：味方単体のHPを小回復

吸収：瀕死のシャドウやHPを削り切り、消滅して黒い煙となった瞬間に使用可能

相手のシャドウを自身に取り込む、但し自分よりLVが高い場合ダメージを受ける

4月4日 初めての番人戦（強敵シャドウ）

side：イズミ

ゴオンゴオンゴオン・・・

青い大型エレベーターの室内で、椅子に座り嬉しそうに紅茶を飲むイズミがいたが
ふと、飲んでいたカップを置いて、イゴールに尋ねた

「あ、そういえば僕がここに来てから1日ぐらい経ったんじゃない？・・・戻った後が大変そうだなあ・・・ここもけっこうおもしろい世界だと思うんだけどねー」

僕が尋ねるとイゴールは新しい合体方法を試す為か、僕の目の前で何も描かれていない
無地のカードを様々な角度から見つめていたが、イズミの言葉に顔を上げた

「ええ、貴方が来てから3日が経っていますな、1日は24時間＋影時間・・・
貴方は影時間のみを体験なさるお方ですから、日が経つのが早いのも当然ですな」

ピシリッ・・・

空気が一瞬凍ったが目でイゴールに『何で教えてくれなかったの？』訴えると

「聞かれなかったものですから・・・フッフ・・・」

と、意地悪そうな笑みを浮かべていたことに、すっかりジオを撃ちそうになっただけで我慢した

「さて・・・完成しました、生贄にする為のシャドウと強化する為のシャドウ・・・このカードにそのシャドウを移すようにイメージしてください」

言われた通りに、裏は青い模様が描かれているが表は真っ白なままのカードを手渡されて

僕が体の中から、最初に手に入れた【臆病のマーヤ】を強化用に、生贄用に同じシャドウを

カードに移すようにイメージすると・・・スウ・・・と何も書かれていないカードに

黒い泥団子のような形に無数の手を生やした【臆病のマーヤ】が描かれた2枚が出来上がった

「それでは、そのカードをお借り致します・・・本来、そのカードはペルソナの為の

カードですので、シャドウを長くそのカードには入れられないのですよ・・・始めます」

突然、イゴールがカードをテーブルに2枚置き、何も触れていないのにイゴールが

右手を振るとカードが裏返しになり・・・複雑な模様がテーブルに青白く浮かびだした

かと思えば、1枚・・・生贄用のカードが燃えて、もう一枚のカードに吸収されるかの

ように、黒い霧が吸い込まれ・・眩しい光が一瞬目の前に広がると
【臆病のマーヤ】が
僕の体の中に戻ったことが分かった・・但し、1体だけが

シャドウ：LV3

アルカナ：魔術師

名称：臆病のマーヤ

HP：47 SP：16

スキル：ブフ

耐性：火・雷・風弱点

頭に浮かんだ情報をよく確認するとイゴールを見つめて『成功だよー』と言うと

「そうですか、シャドウを生贄に他のシャドウを強化する・・生贄にするシャドウによつては

スキルや耐性も強化されるでしょう・・基本的にはLVが上がり能力が上がるのみですが

余りにLV差があるシャドウを・・そうですね、例えばLV50のシャドウの生贄にLV10の

シャドウを生贄にした場合なのですが、その場合は数体のLV10のシャドウを生贄にして

やっとLV51になるといった具合です・・他に注意すべき点はレベルを上げすぎて

ご自身のLVをシャドウが上回る事・・ご理解頂けましたかな？」

なるほどねー、とりあえず余り低レベルのシャドウを生贄にしないことと

自分のLVより上げないようにすることって事だねー

「うん、分かったよーそれじゃあ僕はタルタロス？を登ってくるねー
・っっていうか時間が早く経つのなら早くLV上げないとね、一気に登ろうかなって」

僕が立ち上がって紅茶のお礼を言ってから、ベルベツトルームから出ると

見慣れた・・・とまでは言わないまでも、少し慣れた異様なエントラ
ンスに出て

大きな金時計の門を潜り、タルタロス1Fへと進んだ

かなり大まかに省略して5Fまで行く道のり

■タルタロス1F■

緑色に薄暗く光る通路を走り、途中でアタッシュケースに入ったアイテムなどを数点拾った

「何でアタッシュケースに入ってるの？って何か通路が変わって・
あ、そうだったね」

タルタロスに入る度に、中の地形が変わるという特徴をイゴールから教えられた事を思い出した

「・・・でもさー、お金とか入ってるし、何か傷薬って書いてある瓶

とか入ってたけど

・・・これ、消費期限とか切れてないよね？お金は・・・後でイゴールに聞こうかな」

疑問が沸くばかりだが、後でイゴールに聞くことにして、先へ進む
イズミ

・途中で壁際などから見たシャドウは不意打ちをして、反撃させることなく殴り倒した

ここの敵シャドウは【臆病のマーヤ】しかおらず、吸収はしなかった

■タルタロス 2F ■

階段を見つけて、警戒しながら2Fの通路の一角へ登ってきたイズミだったが

念のため・・・と、【臆病のマーヤ】を5体すべて出して先へ進むと途中で十字路に

差し掛かり、右側の通路を壁際から覗くと、黒い影が蠢いており・・・その影を見つめて

いると、突然飛んできた火の玉が近くにいた【臆病のマーヤ】に直撃しパン！と音を立てて爆発して

当たった【臆病のマーヤ】は火が弱点という事もあるって、体勢を崩してジタバタ暴れていた

「うわ！？・・・ってまずい気づかれた！？・・・ダウンしてる子と2体はそっちを押さえて！」

僕と残りの2体はあのクラゲみたいなのを倒すよ！！」

後ろから飛んできた、火の玉を飛ばしてきた方向を見ると、クラゲのようなピンク色の頭の形をし、空中に浮き体は無く長い黒髪がウネウネと動き、その髪を束ねる部分に赤い仮面を被っていた

そして、その火の玉が爆発する音を聞いて、イズミが警戒して前を向いていた方の2匹のシャドウが向こうから来るのを見えたが、こちらは【臆病のマーヤ】と同じ黒い泥団子のような形をして、姿形が全く一緒だが仮面の色が赤だった

「よし、皆！魔法で攻撃してねーっ・・・【ジオ！】」

バチバチと一体のクラゲ型のシャドウに電撃魔法【ジオ】を浴びせると、ビリビリと痺れて

苦しそうに悶えているが、反撃とばかりに火の玉をこちらに撃っており逆にもう

一体の方は【臆病のマーヤ】2体が無言で氷の塊を撃ちだしてぶつけると、体勢を崩してもがいていた

「・・・あぶなっ！？・・・ああ、このクラゲ？っぽいシャドウは氷が弱点っぽいかな？」

それじゃあ、もう一体の方にも氷のスキル使ってねー？」

咄嗟に屈んで火の玉を回避すると、2体の【臆病のマーヤ】に指示を出して

イズミは倒れてもがいているシャドウに対して、ガスガスと釘バットを振り下ろし

瀕死になった所をニコニコと笑顔で【吸収】と短く唱えて自身へと取り込んだ

横へ向けば、氷結魔法【ブフ】で氷の塊を撃ちだしてバシバシとクラゲ型のシャドウ

【囁くティアラ】に当てて、消滅させた・・・名前は先程吸収した際に浮かんだ情報で覚えた

次に前から来たシャドウを倒そうと、振り向けばちょうど【臆病のマーヤ】3体目が敵シャドウの火の玉で倒されるところだった

「あっちゃあ・・・この子達って火とか弱点だから相性最悪だったかな・・・

今度から覚えておかないと・・・よし！とりあえず2体とも氷のスキル使ってね！」

3体の【臆病のマーヤ】を倒したシャドウは、黒い泥団子のような体に【臆病のマーヤ】

とは違って青い仮面ではなく、赤い仮面を着けている敵シャドウに對して、それぞれ

1体ずつイズミが電撃魔法【ジオ】を撃つと体勢を崩し、同時に氷結魔法【ブフ】の

氷の塊が当たるともう1体も体勢を崩し、両方弱点だという事が分かった

「よし！1体だけ吸収するけど、もう1体はいらないから倒してね！」

後は倒れて起き上がろうとするシャドウ・・・【残酷のマーヤ】を釘バットで

殴りつけた後に【吸収】を唱え、【臆病のマーヤ】の剣で微塵切りにされていた

「へー・・・この子の名前って【残酷のマーヤ】って言うんだねー【臆病のマーヤ】と同じマーヤって名前がついてるけど・・・仮面の色と形が違っただけだよな？アルカナも違っし」

シャドウ：LV3

アルカナ：女教皇

名称：残酷のマーヤ

HP：50 SP：21

スキル：アギ

耐性：火耐 ■ 氷・雷・風弱点

シャドウ：LV3

アルカナ：女教皇

名称：囁くティアラ

HP：46 SP：24

スキル：アギ・ディア

耐性：火耐 ■ 氷・風弱点

（ふーん・・・そのアルカナによって仮面の色と形が違っのかな？女教皇だと赤の仮面・・・とか？
また新しいシャドウを捕まえたら見比べてみようかな・・・うん）

ついでとばかりに分かったのが、火の玉の正体は火炎魔法【アギ】を使ったことだと分かった

その後は何故か通路に落ちてあるアタツシユケースから現金を回収したりしながら3Fへ上がった

■タルタロス 3F→4F ■

その後は【臆病のマーヤ】・【残酷のマーヤ】・【囁くティアラ】の3体以外のシャドウは見かけず、弱点も分かっていたので不意打ちが失敗したとしても弱点を突くといった戦い方で勝利を続けていたが・

「うん・まあ、あれは仕方ないよねー大丈夫、君のお陰で僕は生きてるさーあははー」

と、呑気に笑いながらも一度だけシャドウに不意打ちされ、火炎魔法【アギ】の火の玉がイズミに当たる・所で体内に戻ってあった【臆病のマーヤ】を出す盾にして回避した

犠牲になった【臆病のマーヤ】は消滅したが、イズミは対して気にせず先へと進んだ

その後ストックに【臆病のマーヤ】・【残酷のマーヤ】【囁くティアラ】を2体つつ吸収していて、満腹感を感じていたが不意に戦闘が終了した際に満腹感が消

えたので不思議に思っている、イゴールから手渡された透明のカードが光っていたので手に取ると・・・

- - - - -

遠藤 泉【エンドウ イズミ】

????? LV5

アルカナ：死神

HP121 SP76

スキル：ジオ・ディア・突撃・吸収

耐性：光&闇無効

シャドウ数 6↓8

- - - - -

（・・・あれ？シャドウ数が増えたの？へー、まあ便利だから良いかなー

LVが上がると増えるのかな・・・？んー・・・まあ、そうなの・・・かな？）

少し疑問が残りつつも、通路にいたシャドウを倒しつつ、同じくアタッシュケースの

中にあるアイテム・・・武器もいくつか混じっていたが、重くて全ては持っていけなさそう

なので、体内からマールヤ達を出して運ばせつつも5Fへと進んだ

■ タルタロス 5F ■

5Fへ入った際に雰囲気が変わったのを感じた、周りにシャドウの気配がなく

・中央に今まで感じたことがない程にハッキリとした存在感を放つナニカ

恐らくシャドウであろう存在がいる事が薄暗くて見えないが分かった

「・・・何・・・？あ、そういえば階によっては強いシャドウがいるだけの

階があるってエリザベスが言ってたよね・・・ここかな？注意しないと・・・」

5Fに着いた場所は開けた所だったが真ん中に通路と右側に緑色の脱出装置があったが

敵を確認する為に恐る恐る、真ん中の通路を進んでいくと・・・

バサッ・・・バサッバサッ

中央に翼を広げれば2mはあるかと思われる程の巨大な怪鳥が、3体とも

金の仮面を着けて待ち構えていた・・・ただ、こちらをジッと見ているだけで何もしてこないが

「・・・？気づかれているはずなのに・・・だけど、強そうだね・・・飛んでいるって

事は空中からも攻撃してきそうだから厄介そうだし・・・あ、そうだし！ちよっとそれ頂戴」

こちらを見つめるだけで、何もしてこないカラスのような黒い鳥型のシャドウに

警戒を緩めずに勝つ方法を考えていると、不意に味方シャドウに持たせた拾った武器の内

【ショートボウ】を手に持って、矢筒を背中に背負い弓矢を装備したイズミ

「うん、これなら飛んでもよく狙えば・・・あれ？僕って弓を使っただこと

あるかな・・・？ちょっと練習しようかな・・・こっち来ないよね・・・？」

記憶が無い為に弓を使えるのかな？と首を傾げながら元来た道へと鳥型シャドウを警戒しながら戻るイズミ・・・その後、10分ほど壁に向かって練習していたり

「ふー・・・使えないことは無いけど動いて撃つとなると無理だねー牽制？目的でも使おうかな・・・念のために釘バットも近くに転がして取りにいけるようにっ」と

なかなか使い勝手の良い武器なのか、狙った場所の近くにまで矢が刺さるまで

弓矢を練習すると、中央の薄暗い通路を進んだ

・・・見張りを任せていた【臆病のマーヤ】がいる場所まで来ると、相変わらず

バサッバサッと翼を羽ばたかせる音しかさせず、無言でこちらを見据える鳥型シャドウ3体

「・・・全員で行かないとまずいかな・・・？おいでー皆ー！出番だよ！」

念のためにと、【臆病のマーヤ】・【残酷のマーヤ】・【囁くティアラ】を

それぞれ2体とも全て出し、万全の体制で前へ進むと、今まで動かなかった

鳥型シャドウ3体が一斉に動き出した

「まずは魔法で弱点が無いか試すよ！みんな撃つてね！【ジオ！】」

こちらへ滑空してくる鳥型シャドウ3体へ向けて、最初にイズミの電撃魔法【ジオ】が当たり

一瞬、怯んだが弱点ではないのか飛行を続け、【臆病のマーヤ】が放った氷結魔法【ブフ】も

弱点ではないのか、怯んだのみ・・・そして、【残酷のマーヤ】・【囁くティアラ】が放った

火炎魔法【アギ】は・・・電撃魔法が当たった鳥型シャドウに触れた瞬間に体に吸い込まれる

かのように火の玉が消滅し、傷が塞がり焦げていた羽も元通りになっ

ていた

「え！？このシャドウって火は吸収するの！？・・・変更！！火系のスキルは使わずに攻撃と回復に徹しつきたいっ！」

お返しとばかりに、3体の鳥型シャドウからカマイタチのような風の刃が飛びだし

イズミの右腕を切り裂いたが、軽症なのかそのまま流れるように弓を構えた

（っう・・・これまづいかも？こっちの3種のシャドウ達は風属性が弱点なのに

さっきのは多分、風属性の魔法スキル・・・ああ、やっぱり倒れてるよ・・・仕方ない！）

後ろを見れば、風の刃が直撃したのか【残酷のマーヤ】の2体が倒れてもがいていたが

その上に追撃とばかりに、足の爪で飛びながら攻撃している鳥型シャドウ

「チャーンズ！悪いけど、そのまま攻撃されてて・・・おお？弱点？よしよし！」

弓矢の攻撃属性【貫通】が弱点なのか、矢が体に当たった瞬間に怯むのではなく

地面へと落ち、バサバサ！と慌てて翼を動かしているのを見て、傍の地面に置いて

あった釘バットを拾って、近づきガスガス！と殴りつけ、ピクピクと瀕死になった所を・・・

「よし！【吸収！】・・・ん、成功したね！後は2体・・・あー・・・そうだね」

鳥型シャドウの1体が自分の体へ黒い煙となって、吸い込まれて体内に入ったことを

感じて振り返ると・・・先程、弓で助けた【残酷のマーヤ】も含めて2体とも他の鳥型シャドウ

に攻撃されて消滅する所だったが、イズミは気にせずに取り込んだ鳥型シャドウの情報を見た

シャドウ：LV5

アルカナ：女教皇

名称：ヴィーナスイーグル

HP：150 SP：100

スキル：ガル・マハガル

耐性：火吸収 ■ 風・光・闇無効 ■ 貫通弱点

（え？僕より強くない・・・？って僕と同じレベルだし・・・ガルはさ
つきの風の刃って
分かるんだけど、マハガル？・・・うーん、分からない【ヒュンヒュヒ
ュン！】）

疾風魔法【ガル】・・・確かに、イズミの考えは当たってはいたが【
マハガル】に
ついて考えつつも、地面に落とした弓を拾いにいこうとした所でそ
の身で味わった
・・・突然、2体の鳥型のシャドウ【ヴィーナスイーグル】達から無
数の風の刃が
飛び出し、イズミを含め残りの4体の味方のシャドウにも襲い掛か
った

「ぐっ・・・あっ！！痛い・・・よ・・・ううっ【ディアー！！】」

ザシュザシュと無数の刃に切り刻まれて、全身から血を流して今に
も倒れそう
なイズミだったが、回復魔法【ディア】を半ば叫んで唱えるとイズ
ミの体を優しい

光りが包み込み、風の刃の切り傷を塞ぎ、痛みが治まったイズミが見たのは

倒れた【臆病のマーヤ】達に襲いかかえる敵シャドウ【ヴィーナスイーグル】達

・その一匹に地面に落ちた弓を拾って、矢を構え・放った

「・・・まず一体！・・・続いてもう一体！！・・・倒れたね！回復スキルが

使える子は援護に回って！使えない子は殴って倒すよ！」

一体の【ヴィーナスイーグル】に矢が刺さり、弱点の貫通属性の攻撃の為に

地面へと落ちると、続けてもう1体攻撃に夢中になって動きが止まっている

敵へと矢を放ち、地面へ落とすと釘バットを拾って倒れている1体に狙いを絞って振り下ろした

・その間に倒れていた2体の【臆病のマーヤ】は立ち上がって、無数の手の先に

持つ剣で滅多切りにして【囁くティアラ】は自身が持つ、回復魔法

【ディア】を

攻撃しているイズミ達に使い、傷が治ったイズミ達の攻撃はますます激しくなった

「・・・よし！まとめていけるかな？【吸収！】・・・・・・はぁ・・・もうつかれるよお疲れー」

メキメキツ！と音を立てて釘バットを振り下ろし続け、隣ではザシユザシユと

無数の剣を振り下ろし続けていた【臆病のマーヤ】達・・・苛烈な攻

撃にそろそろ

瀕死になるだろうと、予想し【吸収】を試みると・・・見事に2体とも黒い煙となって

イズミの体へ吸い込まれるのを確認すると・・・気が抜けたのか座り込んで返事はしないが

味方のシャドウ達へ向けて、労いの言葉を送った

「ああーもうめんどくさいし・・・ここまでしんどいつて何なの？死にかけたし・・・

あ、でも死んだら何も感じず、考えなくていいから楽でもいいかも・・・帰ろうかな」

愚痴りながらも、死んだ方が楽でいいかなーと本気で考えていたイズミだったが

とりあえず、少し節々が痛む体を引き摺って、シャドウ達は体に戻して緑色の脱出装置

と教えられた装置に触れると・・・エントランスへと戻っていた

そのまま、吸い込まれるかのようにベルベツトルームへの青い扉を開くと中へ入った

「ねー、何か楽にシャドウ倒せる方法とかないのー？イゴール・・・イゴール？

どうしたの？何か呆けた顔して・・・エリザベスは何で笑ってるのさ・・・

心底めんどくさいといった雰囲気を出して、何か楽に倒せる方法はないかと

尋ねるイズミだったが、入ってきたイズミに対してポカンとするイゴールと

・ クスクスと薄く笑うエリザベスに不思議に思つて自身の体を見ると・

「・・・うわ、服もボロボロだし・・・まあいいやー別に見られても問題ないし、何か服あれば欲しいんだけど・・・ふあゝあ・・・とりあえず僕は

疲れたから寝るよ・・・おやすみ・・・ムニャムニャ・・・」

もはや、服としての機能を保つておらず、胸もまる見え状態だといふのに

疲れて眠気がひどいのか、眠ることを優先してゴロリと床に寝転がつて

寝息を立てて寝だした・・・これには、イゴールも慌てて起こそうと呼びかけるが

すでに、眠る体勢に入つたイズミには聞こえなく・・・そのまま意識を手放して寝た

4月4日 初めての番人戦（強敵シャドウ）（後書き）

次は猫が大好きなキタローさんが出る・・・かもしれない（主人公）

まあ、（女主人公）さんの方も好きなんですけどねー、どっちかと言われればキタローさんの方が・・・ってな感じでして・・・まあ、性格的にも良いかなー？と

・・・序盤でここまで苦戦だと次から危なくないかな・・・？と、猫的には心配だったり

4月7日～4月8日 キタローさんの登場&妖怪鼻長爺（前書き）

えー、キタローさんを出す！とか言っておきながら、度忘れしたのが
キタローさん・・・来るの8日だったじゃないか・・・と、言うわけで
修正

・・・うん、ほとんど無理やり出したんだけどね・・・しかも、出番が
少ないし・・・

何かイゴールがいじられキャラとして定着しつつあるような・・・

4月7日～4月8日 キタローさんの登場&妖怪鼻長爺

4月7日 影時間

side:イズミ

青い部屋・・・ではなく、広々とした大型エレベーターの中に、家具等を置いて

部屋のようにしている室内のソファーに、スヤスヤと眠っていた黒髪の・・・いや、全身が真っ黒な少女が伸びをして、眠そうに瞼を擦っていた

「ん・・・んんんー！！よく寝た？気がするねえーあ、おはよーイゴールー鼻触らせてー」

本来ならば、いつもそのソファーに座っているこの室内の主、白髪の老人の姿だが
何故か鼻が長いイゴール・・・そのイゴールが目の前にいた事で、寝ぼけていた事もあって
つい触りたいなーといった本音が出たイズミ

「・・・早く起きてくださいますか？本来ならば、この部屋は契約を成された方は
私共のお客人として、対応させて頂きますが、睡眠をとるなどといった

部屋ではなく・・・・・・話を聞いてくださいませ」

イゴールがしわがれた声で、イズミに言い聞かせようとするも、本人は起き上がって

傍にいたエリザベスと話していた

「へー・・・ああ、この服ってエリザベスの服と同じなんだねーありがとうー

・・・むう・・・何かして欲しいこととか欲しい物ない？お礼としてだけど、しないと

何か気持ち悪いというか、僕の自己満足の為だからさー、でもけっこう変わった服だよねこれ」

見ればエリザベスが着ている青い服を小さくした服を着ていたイズミただ、その服が袖は無く横から見れば腋や胸が少し見えていたが、イズミからすれば

動きやすい服だと感じ、模様は全体は青一色だが服の中央に黒い目のような模様が

描かれていて、他の者が見ればかなり変わった服だと感じるだろう

「お気に召したようで何よりでございます、それならば私の依頼を受けて

貰えないでしょうか？・・・依頼を達成してくださるのであれば、報酬もお支払い致します

それにしても私のよりも大きいのですね・・・少し憤りを感じます」

丁寧な口調で、自分の服を気に入ってもらえたからか少し嬉しそうに微笑みながら

イズミの申し出を素直に受け取り、自身の依頼・・・もしくはお願いを受けて欲しいとの

事で、イズミからすれば報酬も出るのであれば、厄介な依頼で無い限りは受けるよーと答えた

・・・ただ、最後のポツリと呟いた言葉と共に睨みつける先が、苦しそうに胸の形がくつきりと

服に浮かび上がっている胸部へと視線を向けられたが・・・気づかないフリをして無視するイズミ

そうして、不意にエリザベスが手元に持つてある本から何枚かのカードを取り出し

イズミの目の前の青いテーブルへ並べ始めた、手に取って見れば依頼の内容と報酬が書かれていた

とりあえず、受けてみようかと考えて・・・エリザベスに質問をしながら依頼に目を通すと

「んー、それじゃあこれにするよー最初だし、早く達成？できそうな依頼だからねー」

依頼 No. 01 【甲虫の外殻を1つ入手せよ】 報酬：12000円

僕が複数の依頼の中から、6Fから出てくるシャドウの中でこの素材？アイテム？なのか

分らないけど、落とすらしいので持つてくれば良いらしい、選んだ理由は今の僕が

5Fまで進んだが為に、次の6Fから出るのであれば、ちょうど良いと思っただからである

「・・・ただ、気になるのが僕つてちょっと外見が気持ち悪い虫とか・

・その・・・苦手

なんだけどね・・・んー、泣き言を言っつても仕方ないよね・・・行ってくるよー」

具体的に言えば、昆虫によくついてある、あのウネウネとした足の動きなどが大の苦手

だったイズミだったが、我慢すれば良いやと軽く考えて2人に「行

「つてくるねー」と手を
ヒラヒラ振りながらエントランスへと出ると・・・トコトコと1Fへ
続く豪華な階段を登らず
その横にある、緑色の装置へと指を押し付けた・・・すると、ブオン
と音と共にタルタロスの
塔らしき図形が立体的に浮かび上がり、そこに指を押し付けると階
層が選択出来るらしいと
イゴール達から教えてもらったのだが・・・

「あれ？1Fと5Fしか選べないの？・・・あ、そういえば装置の形
が違ったような？
1Fと5Fにあったのは何か平べったい緑色の装置だったけど、2
～4Fまでの丸い
球状の緑色の装置だったけど・・・この平べったい方は行き来できる
タイプ？で、丸い
方は帰るだけの一本道の装置って事かな？・・・まあ、試して見
れば分かるよねー」

図形にタッチして、5Fの部分を押すと装置が光りだし、イズミが
緑色の光の眩しさに
目を細めているとブオン！と音と共に見ていた景色が変わり、薄暗
い通路へと変わった

・・・ただ、その場所は苦戦した鳥型シャドウがいた通路だが・・・

「うんうん、やっぱりこの平べったいのは行き来できるタイプのよ
うだねー」

・・・でも、物体というか人を瞬間移動させる装置って・・・これ持っ
て帰ったら

大儲け出来そうなんだけど・・・床に張り付いてるし工具が必要かな
？むむむ・・・まあいいやー」

面倒になって後で考えることにしたイズミが奥へと進むと、階段とその傍にアタッシュケース

があったので、何だろう？と思い銀色に光るケースを開けると、中から丸い小さな玉が円を

描くように並んで繋がっているアイテムを1つ手に入れたものの・

「・・・何これ？どうやって使うの？後でエリザベスに聞こうかなー
さてと、そろそろ

のんびりしてたら危ないから・・・ちょっとだけ気合入れてがんばろうかなー」

と、本人は気合を入れているつもりだが、傍から見ればのんびりとした口調のまま

とても、頑張ろうと意気込んでいるようには見えないが・・・そのまま6Fへと進んだ

■タルタロス6F■

またも薄暗く緑色に淡く光る不気味な通路へと入ったイズミは、キョロキョロと辺りを

見渡して、近くに敵シャドウがないことを確認すると、目を瞑って出すシャドウを考えた

その結果、鳥型シャドウ【ヴィーナスイーグル×3】を出して前衛で盾役に命じ、回復役と火炎

魔法の攻撃用にクラゲのような頭をした【囁くティアラ×2】には

回復役と攻撃、氷属性が

弱点の敵がいるかもしれないと考え【臆病のマーヤ×1】を後方に
出して、氷属性の魔法で
攻撃するように命じた後に前を進んだ

「【ヴィーナスイーグル】達ならHPも多いし弱点も無いから、壁
役にしても大丈夫だよな？」

取り込んでいるシャドウの中で一番強いし・・・とりあえず進もうか
なー」

僕が新たな階層に気を引き締めながら、慎重に進んだが・・・確かに
新しい敵シャドウが

出てきたが大したことはなかった・・・ほとんど【ヴィーナスイーグ
ル】達が圧倒していたからだ

例えば、右手を大人程に大きくして指で立ち、手首の部分が頭にな
っており顔の部分には

青い仮面を着けている異形のシャドウ・・・試しに吸い込んだが【マ
ジックハンド】というらしい
スキルや弱点などを見ると・・・

シャドウ：LV4

アルカナ：魔術師

名称：マジックハンド

HP：52 SP：24

スキル：ブフ・マハブフ

耐性：氷耐 ■ 火弱点

「へー・・・【臆病のマーヤ】より使える子だねー・・・今度、生贄合体の強化で使おうかな
あ、でもこれで8体全部埋まったから、もうシャドウは吸収できないけど・・・まあいいかなー」

ステータスを確認し終わると、満腹感を感じてちょうど限界の8体まで吸収したイズミ
だったが、のんびりした口調で気にせずにはスタスタと歩き出した

途中で、今度は小さな子供の大きさの天使のような姿をしたシャドウ・・・但し、翼も体も全て黒く、赤い仮面を顔につけて弓で矢を撃ってくる危険な相手だったがその翼で飛んでいるという事もあって【ヴィーナスイーグル×3】達に攻撃を命じるとその足の爪で簡単に切り裂かれ、黒い煙となって消滅した・・・このシャドウは吸収していない為に名称も能力値などは分からなかったが・・・

その後はこの6Fでは、今まで見たことのあるシャドウと新しいシヤドウ達に対しても色々な属性の魔法をぶつけて、どれが倒れて身動きが取れなくなる弱点の属性なのかと調べると、途中で見かけたアタッシュケースの中に入っている現金やアイテムも忘れず回収して7Fへと登った・・・ただ、アイテムの中にグミ？のようなブニョブニョとした赤いグミのような物を手に入れたが、使い方が分からずとりあえず、ポケットに入れた

■タルタロス 7F ■

タルタロスの新たな階層へ進んだイズミ達だったが、対して目新しい物もなく

敵シャドウも今まで見たことがあり、弱点もすでに確認しているので楽に無傷で

倒せ・・・8Fへの階段を見つけた時に、その階段の目の前に巨大な影が見えた

「・・・何？カブトムシ？・・・って大きいよね・・・あ！外殻というか甲羅？持つてるし

この子かな？ああ、良かったあ・・・まだ大丈夫な昆虫だったよ・・・よし！皆倒すよー！」

見れば、巨大な大人を一回り大きくしたような巨大な黒いカブトムシのシャドウが

現れた・・・その角の先には紫の仮面を着けており、テカテカと黒光りする堅そうな

甲羅・・・もとい外殻を持っているカブトムシが依頼の目的だと分かり気を引き締め

あの堅そうな外殻だと、通常攻撃は余り効かないと思い、様子見も兼ねて

【ヴィーナスイーグル×3】に弱点を調べる為に、風属性の魔法で攻撃するように指示すると

ザシュっ！・・・ボタン

呆気なく風の刃が当たった瞬間にひっくり返り、まさか一発で弱点

が分かるとは思わなかった

が、「運が良いねー」・・・と、のんびりした口調で眩き釘バットを構えてトドメを刺そうとした所で・・・・・・・・ピタリと足を止めた

ウネウネウネウネ・・・

「え、ええええええ！？き、気持ちわるっ！？・・・・が、我慢すれば何とか

いけそうだけど・・・うつ・・・あ、そうだよー何も僕がやらなくても良いよねー？

うん、みんなトドメに全員で攻撃してねー・・・・・・・・僕は後ろ向いてるよー」

ひっくり返った為か、黒いカブトムシ型のシャドウの6本の足がウネウネと起き上がるう

と動いている様子に、強い嫌悪感を感じたイズミが悲鳴・・・もとい叫んで冷や汗を

ダラダラ流し、どうするかと考えていたが・・・ふと自分がやらなくても他のに

任せればと考え、味方シャドウに全員で攻撃するように命じると、自分はクルリと

後ろを振り向いて、見ないことにした・・・・・・・・何故なら

ザシュツザシュツグチャツ・・・・・・・・シュウウウ・・・

予想した通り、不気味な音が聞こえ多分、敵シャドウがいる方向へ振り向けばグロテスク

・・・・トラウマ級のモノが見れると思ったイズミが消滅する音を聞いて振り返ると

何もなかったかのように階段と味方シャドウ達が見えた・・・ただ、床に大きなテカテカと

光る黒い甲羅・・・もとい外殻があるのが見えた

「・・・これ、持ってかえるの？いや、昆虫とかちよつと苦手なだけなんだけどさあー

もういいや、今日はこれ持って帰るだけにして終わろうかな・・・うん・・・あれ？今の何だろ？」

無数の手を持つ【臆病のマーヤ】に大きな外殻を持たせ、スタスタと早歩きで緑色に

光る球状の帰還装置に触れようとした所で、金色に光る大人程の大ききの右手に手首が顔に

なっている、金色のシャドウを見かけたが、相手も自分に気づいたらしく・・・ダッシュで

背を向けて逃げ出した・・・追いかけるのも面倒だと思い、エントランスへと戻ると

ここでも早歩きで階段の横にある青い扉・・・ベルベツトルームへと入ると

青いテーブルの上へその外殻を置いた

「依頼を達成なさったのですね・・・それでは報酬をお支払い致します・・・どうかನさいましたか？何か幽霊でも見たような・・・」

どこから出したのか、報酬の1万2千円をテーブルに置くと、巨大な外殻を片手で

持ち上げると、部屋の隅に置くエリザベスだったがイズミの表情が不機嫌そうに

しているのに気づき、声を掛けると・・・

「うー．．だつてさー僕って昆虫とか苦手って訳じゃないんだけど．
・そのカブトムシ
みたいなシャドウは苦手だよ．．はぁ．．そういえば今日って5日
ぐらいかな？
もしかしたら6日ぐらいかもしれないけどさー時間の経ち方が分か
らないよ．．むう」

イズミは1日．．24時間を過ごすのではなく、1日に隠された時
間．．24時間+影時間
と呼ばれる影時間のみを過ごしているが為に、1日が過ぎるのが早
い為、何日か尋ねると
・イゴールが待つてましたとばかりに、意地の悪い笑みを浮かべ
ながらテーブルを挟んだ
向かい側のイスへと座ると．．

「ええ、今日は4月7日．．後もう少しで8日になりますな、ふふ
ふ．．何故？
と思つておいでですか？貴方が4日にここへ戻り、睡眠をとり続け
た結果、3日
経つていた．．ただ、それだけの事ですよ．．ふふふ．．いや、言
い忘れておりました」

イゴールが勿体ぶるように、話をする様子に．．言い忘れていたと
言つておきながら
漏れる笑い声にわざとしか思えないが．．

（え？何このおじいちゃん？ものすごくイラッとするんだけど．．
駄目だ、うつかり
攻撃しそうになるけど、我慢だ！我慢するんだ僕！．．．．．さ
て、と）

頬を引き攣らせながらも、何とか心の底から湧き出る殺意を抑え込み、ゆつくりと

哀れむような視線で見つめ、表情は慈愛の笑みを浮かべ・

「仕方がないよねー、年だもの・・僕の記憶が戻ったら老人介護施設を紹介するよー

あ、ついでのオムツとかもプレゼントしようか？必要なんじゃないかなー？

・・それにその長い鼻も病気なんじゃない？腫瘍とか栄養がその鼻に吸われて伸びたとかあるんじゃないかなー？・・おお、怖い怖い」

ニコニコと笑顔で親切・・・を装って毒を吐くイズミに対して、先ほどのイズミのように引き攣った笑みを浮かべるイゴール

「いやいや、貴方程では・・栄養をその胸に吸収されたのではないでしょうかな？

・・・おや？そういえば、すっかり合体の際に失敗しそうな気が・・これは事故ですから仕方がないことですな・・そう、事故なのですから・・」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて、立場を利用するイゴール・

【生贄合体】の際には強化目的に使われる合体だが、稀に事故が起こる事があると聞かされたのを思い出した

その際には運が良ければ、強いシャドウに変貌したり、能力が大幅に上がったりするなど

良いことがあるが、大抵が弱いシャドウに変貌したり、能力が大幅

に下がるのが多いそうだ

・万全の準備をしても、事故が起こるのは防げないらしく・・・もしも故意にその合体を実行する人物が手を抜いたとなれば・・・

「そ、そうかなあー？胸はちょっと気にしてるから言わないで欲しいんだけどさあー？

・・・ぐ、ぐぐぐ・・・もう僕は寝ることにするよ・・・むうう・・・」

ここで挑発に乗れば、この影時間で生き延びる術を学ぶことが出来なくなるのと

合体を故意に失敗し、せっかく強いシャドウを手に入れたのに弱くさせられたのではと

自分の内より溢れる殺意を抑え込み、ここは大人の対応・・・と、唸りながらも席を立つが

目の前にこちらを向いて勝者の笑みと言わんばかりの余裕の笑みを浮かべている

イゴールに対して、再度唸るイズミだったがエリザベスがいる場所へ早歩きで向かった

「エリザベスーあの性悪老人を懲らしめる方法ないかなー？主に鼻を折るとか削ぐとか

もいでやるとか切るとか・・・やって良い？むしろ殺っていいよね？」

僕が提案すると、エリザベスは静かに「それは・・・今は我慢してくださいませ」と

後なら殺っていいと受け取り、我慢することにした・・・イゴールは逆に慌てているが

「エ、エリザベス！何を言うのですか！？私の鼻を折ったり削ったりなど許すはずがありませんぞ！・・・ところで客人・・・今日である8日のご予定はいかがかな？」

- 4月7日 影時間 終了 -

- 4月8日 影時間 開始 -

イゴールが仕返しとばかりに、今から8日だと伝え時間がどんどん過ぎていくのが分かるが、記憶がないものの恐らく日常に戻った時に日が経てば経つ程に、自分にとって厄介な事が起きるに違いないと考えての事だったが・・・氣を取り直してとりあえずLVを上げる事に専念するか気分転換に散歩・・・この不気味な世界影時間を見て回るのも良いかと考えたが、ひとまずはエリザベスの役に立つ話を聞いてからにしようと考えた

・様々な質問などを終えて、戦闘に対しての知識や道具の使い方などを教えてもらいひと段落とばかりに、紅茶を出してくれたエリザベスに感謝しながらも他愛無い雑談をしつつ・ふと、エントランスへ戻る際の黄金色の右手の形をしたシャドウを思い出しその事を聞いてみようかと尋ねた

「あ、そういえばさー帰る時に黄金色？の大きな手の形をしたシャドウがいたんだけどさーあれって何っ！？こ、怖い！！怖いからエリザベス！！どうしたの！？あいたただだ！！」

突然、話を優しく微笑んで聞いていたエリザベスが豹変し、イズミの両肩をガツチリ

掴んでまるで、万力のような力で締め上げるので思わず呻いてエリザベスの目を見ると

・・・猟犬のような獰猛な瞳でイズミを睨みつけていた

「・・・はっ！？・・・も、申し訳ございません・・・ですが、その・・・ご忠告と

申し上げますか、その黄金色のシャドウを見かけた際には必ず・必ず！仕留めるのです

退路を塞ぎ、ただひたすらに殴りつけるのです、相手が消滅するまで・・・！よろしいですね？」

大事なことなのか、少し熱の籠った瞳で僕を見つめながら倒すように！と念入りに

言われて、思わずコクコクコク！と何度も首を縦に振ってしまった

（今のはびっくりしたよ・・・ん、でも人は見かけによらないって身
に染みて分かったねー

・・・エリザベスって多分・・・僕より・・・いや、今まで見たシャドウ
よりも強い・・・？）

そつと、掴まれていた肩に手を当て、骨が碎けるのではないかとい
う程の握力を持って

いるとイズミがエリザベスに対しての認識を改めていた・・・その底
が見えない実力に対してや

シャドウや戦闘に対しての知識の深さに心の中で警戒するように決
めた

その後はまたも、エリザベスが用意してくれた妙に美味しい紅茶を
飲みながら

雑談をしていると・・・不意にイゴールがそわそわとした様子でイズ
ミに話しかけてきた

「お客人、貴方が早くこの影時間を抜け出て日常へ戻る為にLV
を上げに向かった

方がよろしいのではないのでしょうか・・・少し老婆心が出てしま
いましたか・・・」

と、イゴールが親切を装って提案するも・・・イゴールの瞳から焦り
の感情を読み取った

イズミが、この後に何かある・・・と思い、意地悪しようかと薄く笑
った

「あー、それがさーちょっと足が痛くて・・・それに眠くなってきた
し・・・うん、寝て

から向かうことにするよーあははー！・・・で、この後に何かあるの？」

急に足が痛いと言わざとらしく振舞ったりと、イゴールに話さなければ居座ると

アピールすると、悟ったのか少し悔しそうに目を伏せた後に・

「いえ、この後に他のお客様をお招きする予定でして・・・イズミ様の対応が

出来ません故、失礼かと思ひ提案した次第なのですが」

「あ、そうなの？どんな人か見てから行くよー・・・大丈夫、失礼じゃないから

イゴールはそのお客様の対応をされていていいよ？うん、僕って優しいでしょう？あははー！」

話の途中でイズミが途中から割り込み、全然迷惑していないから・・・と、言う

どさりとイスに座り込んだ・・・イゴールは今更ながら下手に出たのがまずかった・・・

と、後悔して床に膝を突いていたが顔を上げた瞬間に・・・イズミの勝ち誇ったような

イゴールからすれば、憎らしい笑顔に頬が思わず引き攣ってしまった

「ぐ・・・！し、仕方ないですな・・・その代わり静かにしておいてくだされ！！

決して邪魔をしないでくださいよお客様！！・・・それでは・・・」

これ以上の交渉は無意味だと判断したイゴールが、仕方がないとばかりに

テーブルの前のソファへと座り、エリザベスが示し合わせたように対面に

イスを置き、僕が座っているイスは何故かその後ろへと配置された

僕が首を傾げていると、唐突に後ろの青いドアが『ギイイ・・・』と音を立てて

開いた音が聞こえ、驚いてバツ！と振り向くも、静かにドアが再び閉まる光景だった

・・・疑問に思いながらも、前を振り向くとイゴールの姿・・・ではなく、先ほどまで

誰も座っていなかったはずのイスに黒い制服？らしき服を着た青いシートヘアーの

男性が座っていた・・・すると、イゴールが静かに口を開いた

「ようこそ・・・」ベルベツトルム」へ。私の名は、イゴール。

・・・お初にお目にかかります。こちらはエリザベス、同じくこの住人だ。」

と、僕が最初に来た時の言葉をそのまま目の前の・・・後姿しか見えないが

青いシートヘアーの少年に向けて話すイゴール・・・青髪の少年はイゴールと

エリザベスを交互に見るように顔を向けたようだが、表情はここからでは見えなかったが

対して、驚いたような雰囲気は感じなかった

（・・・初めて来た？ようだけど、驚いてないようだね・・・背的には僕より大きいけど

高校生かな？・・・あ、でもこの後姿を見るとつい・・・驚かせてみたい衝動が・・・）

ウズウズと、後ろから「わっ！」と驚かせたい衝動を我慢していると、エリザベスも

自身の紹介が終わり、この部屋が何であるかを話すと、イゴールが目の前に置いてある

テーブルに一枚の書類が出され、契約を成した者のみが入れる部屋だと話した

どうやら、この少年もイゴールと何らかの？契約”をしたらしい

「貴方は？力”を磨くべき運命にあり、必ずや、私の手助けが必要なるでしょう。

貴方が支払うべき代価は1つ、？契約”に従い、ご自身の選択に相応の責任を持って頂くことです。」

（力が必要な運命・・・？って未来が分かってそうな感じなんだけどそれなら素直に教えてもいいと思うんだけどな・・・やっぱり性悪老人なのかな・・・クスクス・・・）

僕が思わず笑いそうになるのを堪えて、少年の反応を見るも・・・先ほどと雰囲気は全く変わらず、どこか掴みどころない雰囲気を出している少年に興味を抱くと・・・

「これは・・・夢？」

短く、感情を感じさせない無機質な声だったが、目の前の鼻が長い老人や

この大型エレベーターの中を部屋にしているのを見れば、普通は夢

だと思っだろうと

納得はするものの、イズミが興味を引かれたのは・・・少年の無機質な声に興味を持った

（へえ・・・動揺もしないなんて・・・それに、何だろう？この感情が籠っていない声

・・・んー、何だか最初から？失うものが何もない”全てを諦めたか達観したような・・・
そんな事を連想させる声だね・・・うん、僕に似てる感じがするけど・・・）

イズミが少年の顔はどうなんだろう？前に出てみようかな？とも考えたが

とりあえずは、成り行きを見守ることにした

「左様・・・現実の貴方は、今は眠りの中にいらっしゃる。言わば貴方は、夢として
ここを訪れているに過ぎません。しかし、いずれはご自身の脚でいらっしゃる機会もあるでしょう。・・・これをお持ちなさい。・・・それでは、またお会いしましょう。」

僕が心の中で、夢として訪れている・・・いや、目の前にいる少年が現実世界？で眠っているが、ここに来ているという矛盾・・・精神だけがこちらに来ているのだろうか？とも
推測したりと、考え込んでいるイズミを尻目に、イゴールが少年の手に青い鍵

”契約者の鍵”を渡すのを見届けると・・・不意に少年の体が光の粒となって掻き消えた

「・・・え？・・・えええ！？驚かそうかと思ったのに！！・・・ああ、
まともそうな人
が出てきたかと・・・あ、エリザベスは良い人だと思うよ？その妖怪と違って・・・ぷっ」

と、先ほどまで威厳を保っていた妖怪・・・もとい、イゴールがそのフランスパンをくつつけた

かのような長い鼻をプルプルと震わせながら、イズミを睨みつけるが、当のイズミは

自分の言った事が可笑しかったらしく、お腹を抱えて笑い転げていた

・・・この青い大型エレベーターの室内では、全身が真っ黒な少女が笑い転げており

鼻が長い白髪の老人はプルプルと怒りに身を震わせ、エリザベスはくすくすと薄く笑っていた

4月7日～4月8日 キタローさんの登場&妖怪鼻長爺（後書き）

さー、次は大型シャドウだー・・・まあ、猫の妄想が次の話に混ざりそうですが

・・・うん、違和感が無いように調整しますです・・・ハイ・・・

Q 更新が遅くないっすか？

A、のんびりでお願いします・・・いや、まあ出来るだけ早くするんですけどね

・・・んー、でもキタローさん（男主人公）の名前・・・どうしようかなあー

漫画版の名前とか・・・使っていいかな？いいよね？・・・どうなんだろう？

New 装備品：エリザベスの服（小） 防御力200

エリザベスの服だからありえそうなんだけど・・・え？何でこうなったの？

防御力とかも弱くしようかな・・・いや、でもエリザベスの（無限ループ）

4月9日 大型シャドウとの遭遇（前書き）

やー、何かめっさ遅くなつとるがな・・

まあ、こっちの方？はのんびりと交信していこうかなーと思います
よーい

4月9日 大型シャドウとの遭遇

side:イズミ

4月9日 影時間 開始

ビュウウウ・・・

緑の色に染まった空、血の色に染まった水溜りがポツポツと真下を覗けば見える
吹き荒ぶ風が頬を通り、自身は空を飛ぶ開放感を楽しんでいた・・・
そう、飛んでいるのだ

「やー、気持ち良いねー散歩でもしようかなーって思ったけど空を飛ぶ方が楽しいやー

・・・落ちたら死ぬだろうけど・・・がんばってねー【ヴィーナスイーグル】

それにしても満月・・・と、いつか月が大きすぎでしょ・・・何あの大きさ・・・」

鳥型シャドウ・・・その2mはあろうかという黒い怪鳥にしがみついて影時間になっている世界を飛び回っているイズミ、空には本来ならばあり得ない

大きさになっている満月・・・通常の数倍・・・いや、10倍程に至るかもしれない

その大きさに呆れながらも、眼下には海に浮かぶ人工島があった

- 時を少し戻しベルベツトルーム内 -

ゴウンゴウン・・・

機械音が室内に響く中、ゴロゴロとソファーの上でだらけていたイズミだったが

不意にピン！と立ち上がると、スタスタと外へと続く扉へと向かった

「うん、たまには気分転換に散歩にでも行ってくるよー何か情報？とかも

得られるかもしれないしねー塔ばかり登るとなると精神的にきついんだよね・・・」

タルタロスを登り続けている内に、あの緑色に光る細い通路ばかり見続けているような

奇妙な感覚に陥り、その視覚から来る単調な刺激に微々たるものながらも、ストレスが

溜まって来ていると感じたイズミがストレス解消も兼ねて、エリザベスに出かけてくると

伝えると、スタスタと積み木を重ねたような建物・・・異形の塔：タルタロスから出ると

【ヴィーナスイーグル×3】を呼び出し、2匹は護衛に、もう1匹の背中にしがみつくと

空へと飛ぶように指示して現在に至る・・・

「なははー、楽しいやー．．それにしても少しづつだけど記憶が戻ってきてるのかな？」

ここは確か人工の島だって事も思い出したし．．モノレールで本土と繋がってるんだよね」

真下を見れば、異形の塔：タルタロスが建っている大地から少し視線をずらすと周りを

海で囲まれており、微かな記憶だが、ここが確か海を埋め立てて作った人工の島だという事を

思い出した

「うんうん、記憶が戻ってきてるのは良い事？だよなー．．それじゃあ向こう側へ

行ってみようかな？何か手がかりがあるかもしれないし．．向こうへ行ってみる」

3体の【ヴィーナスイーグル】達に指示を出すと、人工島から本土へと繋がるモノレール

のレールに沿って飛ぶと、遠くに小山とその頂上に神社．．真下に駅が見えてくると

一旦、地上の駅へと降りてみるものの．．黒い棺が立ち並ぶ不気味な場所と化していた

「うわぁ．．そういえばこの棺って影時間に適應できない人が棺になるんだよね

何か凄くない不気味なんだけど．．はぁ．．もう目に悪い世界だよ早く戻り．．ん？」

タッタッタッタ．．

動くモノがないこの影時間に誰かが走ってくる足音が、イズミの耳に届き急いで

自転車置き場に大量に置かれてある、自転車の間に身を隠し、出していたシャドウも

自分の体の中へと戻すと・・

「・・む？何か動く者が見えた気がしたが・・気のせいかな？・・シャドウが

出てくれば良いトレーニングになるんだが・・フッ！シッ！」

銀色の髪に赤いセーターと白いシャツを着た青年・・高校生程の身長があり

その青年が訝しげに辺りを見渡すも何も無いと判断したのか、再び走り出して

何故かシャドーボクシングをしながらこの影時間の中を動いていた

・・見失わないように、小さくなったその後姿を確認すると、自転車置き場から

体を出して再び鳥型シャドウ【ヴィーナスイーグル×3】を出して、空から追いかけた

「シャドウを知ってる・・？それに棺があっても気にもしない・・ということとは

影時間に入るのは1度や2度じゃない・・何が目的で僕にとって敵が味方かは分からない

けれど・・この体だとまず敵と認識されるよね・・はぁ・・どうやって聞き出そうかな？」

この影時間で見つけた人間・・本来なら、自分は人に余り関わらな

い・・・関わりたくない

性質なのだが、この場合は仕方がないと我慢して話そうにも・・・全身が肌の色までもが

炭のように真っ黒な体で、赤い目だけが爛々と光る今の姿・・・まず、味方とは思わないだろう

そうやって、最終的にはシャドウで押さえつけて無理やり聞き出そうかと考えていると・・・

ウオオオオオオ・・・！！

突然、地に響くような低い唸り声が聞こえ、イズミが声が聞こえた方へ向くと駅の改札口の

前の広場に、無数の剣を構えた泥団子のようなシャドウ【臆病のマーヤ】がいた・・・が

「ああ、ただのシャドウ・・・って何あの大きさ！？おかしくないあれ！！

うつわ・・・あれは関わりたくないや・・・あの人も逃げるよね・・・つてええ！？」

見れば、【臆病のマーヤ】の6〜7倍ほどの大きさ・・・まるで象のように大きなその体から

無数に生える手の先には剣が握られており、あの巨大なシャドウは相手にしたくないと

考えていたが・・・ふと、あの青年の方を向くと・・・嬉々とした様子でシャドウの前へ進み出た

「これは・・・何て大きさだ！ふっ・・・相手にとって不足は無さそうだな！」

と、何故か手に着けていた赤いボクシンググローブを前に出し、タ
ンタンと足で
軽いリズムを取り出した銀髪の青年を見て、思わず叫んでしまっ
た
がどうやら
聞こえなかったらしい

（いやいやいや！？アレに突っ込むとかもうバカじゃないの！？・
あ、でも
あのシャドウを相手にしても勝てる自信があるのかな・・・？今は様
子見かな？）

左腕に巻かれている【SEES】と、何かの略称が書かれた赤い腕
章が
揺らめくと、目の前の大型シャドウが動き出し、無数の剣が青年に
襲いかかる

「遅い・・・チッツ！近寄らせない気か・・・！？ならば・・・！」

ボクシングの構えのまま、無数の剣がザクザクと青年へと襲い掛か
るが
軽い身のこなしで全て回避するものの、相手へ近づけば近づく程に
攻撃が
苛烈になる為に攻撃が出来ないと判断したのか、一旦間合いを大き
く離すと
腰にあるホルスターから銀色の銃を取り出し・・・自身の額へ銃口を
当てた

「来い！ペルソナ！【ポリデュークス】！！」

ガンッ！！と、銃声が響き血が飛び散るかと思えば、空砲なのか青

年は

無傷であり、代わりとばかりに青いガラスの破片が青年の体から飛び出し・・・その

ガラスの破片が青年の背後で集まり、人の形を作り上げていく

（てつきり自殺かと思ってビックリしたよ・・・ふーん・・・あれがペルソナ・・・？）

イズミから見れば、真下に見える青年の後ろに金髪の長髪を揺らしながら現れた

3mはあろうかという巨人・・・だが、その外見は人間とは思えない姿であり右腕が

針のように尖った右腕となっていたり、全身が筋肉で膨張し、顔も白色で統一された

ものであったが・・・イズミから見れば、全身にタイツを着た変態にしか見えなかった

その銀髪の青年が呼び出した　ペルソナ【ポリデュークス】が無数の剣を振るう

大型シャドウに対して、正面から針のように尖った右腕を振るい殴り飛ばした

「よし！この瞬間を待っていた！仕掛けるっ！！」

悲鳴を上げて吹き飛んだ先で土煙の中で悶える大型シャドウに、好機とばかりに

踏みこんで、鍛え上げた拳を振り下ろそうとするも・・・

ピギヤアッ！！・・・ブンッ！！

突然、奇声を発しながら大型シャドウが無数の腕を無茶苦茶に振り回し

その内の一本が青年の右脇腹に直撃し、吹き飛ばされ壁に激突した

「くっ・・・！！腕が折れたか・・・！？ここはひとまず撤退した方が良さそうだな！！」

だらりと青年の左腕が垂れる・・・どうやら、壁に激突した時に骨が折れたらしく

右腕で庇うように走り去る青年・・・当然、負傷した相手を見逃すはずも無く

後を追いかける大型シャドウ

（・・・うーん・・・確かに強いけど後一步足りなかったみたいだねー
どうしよう？助けようかな？・・・あー、でも好戦的そうだし・・・や
っぱり様子見かなー）

助けた後に同じく敵と認識されて、攻撃される可能性の方が高いと判断した

イズミが上空から走り去る青年の頭上を飛んでいると・・・耳元に手を当てて

何かイヤホンのようなもので話しているのか、声が聞こえたので近づいてみると・・・

「凄いヤツを見つけたっ！これまで、見たことないヤツだ！ただ、あいにく

追われててな・・・もうすぐそっちに着くから一応、知らせておく！」

子供が玩具を見つけたように、楽しそうな笑みを浮かべながらどこかへと連絡を

する青年の様子に、少し呆れた様子で上空からイズミが見つめていた

（追われててって・・・自分が先に仕掛けたのに・・・だけど、連絡するって事は

他に誰か人がいるのかな？あれ？それに影時間って電氣が使えないはずなんだけど・・・？）

んー、と首を傾げて唸っていたイズミだが、これ以上考えても答えは出ないと

判断すると、追いかけているシャドウを見ると・・・大型シャドウの後ろに

8体ほどの【臆病のマーヤ】達が続いて追いかけてきていた

「あ、あれ？増えてる？うっわー・・・まだ弱い方のシャドウだけこの数だと

苦戦するかな？仕方がない・・・少しはサポートしようかな・・・えーと、2体は

後ろの方から【ガル】を撃って、追いかけている集団から切り離したらトドメを

刺してね！・・・危ないと思ったら逃げてくれていいからねー作戦名は命大事に！だよ！」

敵になる可能性もあるが、今は少しでも情報が得られればと少しは手伝うことにして

大型シャドウの取り巻き達を倒す指示を2体の【ヴィーナスীগール】達に出すと

コクリとその金色の仮面を上下に動かし、スーと音も無く地面へと降下していった

イズミ自信は3体目の【ヴィーナスীগール】に乗ったまま、空か

ら青年を見つめて

いると、青年が4階建てのレンガ造りの建物の扉へ飛び込んだ後にガチャガチャと音が

聞こえたので、鍵をかけているのだろう・・・だが、大型シャドウはそんな事は

構わないとばかりに、建物に体当たりを始めた

ズーン・・・ズーン・・・!!

「あつちやあ・・・これはちよつとまずいんじゃないかなー？仕方がない

中から見られる可能性もあるけど戦おうかな？取り込めれば戦力強化に・・・って

ああ！？僕って今はシャドウ一杯まで取り込んだから、これ以上取り込めないよ!？」

ガーン!と、効果音が聞こえるぐらいに吸収できない事にガツクリと頂垂れるイズミがいた

さすがに、何の見返りも無しにあの大型シャドウを相手にするのは嫌だなーと考え

せめて、少しは今現在も大型シャドウに体当たされて、建物がグラグラと揺らされて

混乱に陥っているであろう、建物内の人達が楽になるように、周りの取り巻きを倒す

ことに

「さーてと、気づかれないように・・・あ、おかえりー倒してきてくれた？」

後方の取り巻き達を倒してくるように指示していた【ヴィーナスイ

「グル」達が2体とも

戻ってきたので、聞くとその頭をコクコクと上下に動かしていた

確認すると、3体倒してきたらしく残りは5体の泥団子のような黒い体を持つ

【臆病のマーヤ】達が青年が立てこもった建物を包囲していた・
が、不意に

1匹の臆病のマーヤが飛び掛り、窓を割って中へと侵入した

「侵入されちゃったかあ・・仕方がない、入ったのは無視して外にいる奴を狙おうかな

・・皆ー！魔法で攻撃してねー！近づいて攻撃は危ないから止めようねー」

2体の【ヴィーナスイーグル】に再び指示を出すと、しっかりと遠距離から無数の風の刃

・・疾風魔法【マハガル】を撃って攻撃しているのを確認すると、自身は状況を

把握する為に更に高度を上げて周りの状況を確認している最中に大型シャドウの方を見ると

「おお・・何か壁を登ってるよこの子・・うん、とりあえず壁から引き落とそうかな

おい、一旦攻撃の標的をあの壁にうつわっ！？」

ギョロリと大型シャドウが手に持っている青い仮面がこちらに向いたかと思えば

その体から火花が飛び散り、人の頭程の大きさの火球が飛んでくるのを咄嗟に

【ヴィーナスイーグル】が避けたものの、突然の事にイズミが背中

からずり落ちて

足にしがみついていた

「お、落ちる．．．！！隣！その隣のビルへ移ってよ！！．．．はあ．．
・ビックリしたあ．．」

バサツと翼を羽ばたかせて指示された隣の建物の屋上へと、連れて
いってもらい

手を離して屋上へ着地すると溜息をついて、後ろを振り返ると．．

「あー登っちゃった．．でも、こんな時間に屋上にいる人なんて．．
って2人いる？

運が悪いねー．．って本来なら見捨てるんだけど、今は貴重な情報
源だから．．ん？

あの人．．ああ、ベルベツトルームにいた人だねー．．ん、ここか
らじゃよく見えないや」

再び鳥型シャドウ【ヴィーナスイーグル】の背中に乗ると、飛び立
ち屋上にいる

大型シャドウの目の前に立つ2つの影．．1つはベルベツトルーム
で後姿しか

見えないが、雰囲気や青い髪と髪型から同一人物だと特定し、もう
一人は見たことはないが

首に白いチョーカーとピンクの服を着て、茶色に染めた髪が映える
少女がいた

「あれがココを襲ってきた敵．．？シャドウ”よ！．．そ、そうだ．
・戦わなきゃ！」

茶髪の女性が声を震わしながらも、隣にいる青髪の少年より一歩前

に出て

右足に着けていたホルダーから銀色の銃を取り出して額に当てた

（あれ？あのボクシングの人が使ってた銃・・・？あれでペルソナを呼び出すのかな？

念のために他の【ヴィーナスイーグル】達を呼び寄せて・・・何で引き金引かないんだろ？）

正面から銃を引く恐怖に耐えられないのか、額に銃を押し当てたまま固まっていた

「はぁ・・・はぁ・・・！！わ、私だって・・・きやあっ！？」

意を決して引き金を引こうと決意した瞬間、大型シャドウの体から火花が飛び散り

火球が少女の目の前まで飛び、爆発し少女が吹き飛んだ

「あーあ・・・何やってるんだろうね・・・さすがに危険だから援護に行く・・・？」

へえ・・・恐怖でおかしくなったのか・・・それとも、楽しんでるのかな？援護は一旦中止だよー」

ボソボソと近くまで来た【ヴィーナスイーグル×2】が傍まで来たのを確認すると

小声で指示を出そうとした所で・・・少年が銀の銃を手に取り、笑っているのを見た

どうやら、茶髪の少女が持っていた銃が足元まで飛んできたらしい

その様子から、もう少しだけ様子を見れば面白いモノが見れるかもしれない・・・と

半ば自分が楽しむ意味も込めて、見ているとゆつくりと少年が己の額に銃を押し当て・

「すう・・・はあ・・・ペ・・・ル・・・ソ・・・ナー!!」

ガンー!!

少年が深呼吸をして引き金を引くと、辺りに銃の空砲であろう音が響き少年の体からガラスの破片のような青い欠片が飛び散り、背後で人の形を成していく

（・・・ふうん・・・なるほど、どうやらあの銃がペルソナを呼び出す道具みたいだね

だったらあれを取り上げれば無力化出来ると・・・あれがアノ子のペルソナ・・・ね）

オオオオオ・・・!!

背後に現れた異形の人影・・・人と機械を融合させたような体に、背中には大きな白い竖琴を

携えているが、顔つきや髪の色や白だが右目が前髪で隠れている点などはそっくりだった

少年がまるで勝利を確信したかのような笑みと共に、後ろにいるペルソナもまた目の前の敵を威嚇するように吼えた・・・が

「うぐっ!?!・・・っ!・・・うわあああ!!」

少年が突然、頭を押さえて苦しいのか膝を突くと同時に自身が召喚

したペルソナも同時に
呻くと・・・突然、その体から手が生え、箱を無理やりこじ開けるよ
うにペルソナの体の中
からナニカが出てきた・・・少年が呼び出したペルソナの体を粉
々に砕きながら

（新しい・・・ペル・・・ソナ？・・・いや、アレは駄目だ・・・戦ったら
ダメだ勝てない・・・）

フウウウ・・・シャアアア！！

ペルソナの中から現れ・・・いや、食い破ってきたナニカの姿は長剣
を持ち、7つの棺を
背負い、黒衣のマントと銀色の仮面を着けたその姿は・・・まるで遭
遇した者に死を与える
死神を連想させた・・・その姿を見たイズミが思わず、理性よりも・
考えるよりも先に
本能が恐怖を呼び起こし、ただ頭に思い浮かぶのは【この場から今
すぐ逃げろ！】だった

黒衣の死神が吼え、眼前の大型シャドウまで動くと、一線・・・ただ
剣を一振りしただけで
大型シャドウの青い仮面と共に黒い体を切り裂いた、飛び散る黒い
泥のような体の一部・・・
手が千切れて尚もビチビチと魚が陸に上がったように動いていたが、
黒衣の死神がその手
を左手で掴むと・・・グチャリと握りつぶしシュウウ・・・と黒い煙と
なって空中へと消えていった

（一撃で倒すって・・・いや、どれだけ強いのか・・・アレだけは相手

にしたくないね・・・ん？)

役目を終えたかのように、黒衣のペルソナの姿が揺らめくと・・・一瞬で最初に呼び出された
豎琴を持ったペルソナへと変わった

(元に戻った・・・？・・・ペルソナの中からペルソナが出て・・・いや、確かペルソナは
精神を制御して己の力する者を指すんだっただかな？・・・あれは暴走に近いかな？
だったらシャドウ・・・？・・・全く、訳が分からない事が多すぎて困るよ・・・はぁ・・・)

見たことを改めて整理して、理解しようとしても理解不能な事が・・・常識が通じない
この影時間の中で起こる事に、頭が痛くなるのを感じて、思考を一時中断して下を見た

「終わった・・・の？・・・っ！？・・・まだ動いてる・・・やつ・・・こ、来ないで！！」

ピンクの服を着た少女が、安堵の溜息を吐こうとした瞬間、切り裂かれた大型シャドウの
破片が集まり出し、4匹の【臆病のマーヤ】となって少女へと近寄り出した

悲鳴を上げて逃げ出そうとするも、腰が抜けているのか座ったままの状態にいる

少女へ、少年が前に飛び出しいつのまにか持っていた小型の剣と銀色の銃を手に持ち立ち塞がった

「くっ・・・止めるんだ【オルフェウス!】」

再びガン!!と銃口を額に当てて引くと、呼び出された豎琴を持ち機械の体を持った

ペルソナ【オルフェウス】が背中に背負った豎琴で1体の【臆病のマーヤ】に

振り下ろして叩き潰すと、いとも簡単に消滅した・・・だが、少年の表情は苦しそうに

歪み、汗も尋常ではない量が出て、今にも倒れそうな様子だった

「うんうん、なかなかおもしろいモノ?があるから、今回は助けようかなー

姿は見られたくないから・・・行っておいで、あの2人を守って残りのシャドウを倒すこと」

ケラケラと楽しそうに笑いながら、襲われそうな2人を見下ろしながら、傍にいた

鳥型シャドウ【ヴィーナスイーグル×2】に命じると、一直線に急降下して

少年と少女・・・2人の前に立ち塞がった

「嘘・・・新手のシャドウ!?!・・・君!!早く逃げて!!・・・って・・・え?」

新たなシャドウの登場に、啞然として顔を青ざめていたが、いち早く少女が

少年へ呼びかけて逃げるように言うが・・・出てきたシャドウが目の前のシャドウに

襲い掛かるという事態に信じられないという表情で目を見開いた

「味方・・・倒してくれるならありがたいけど・・・とりあえず下がらせてもらうよ」

誰に言うでもなく、淡々とした言葉で無表情に少年がゆっくりと剣と銃を持ちながら

少女の元まで歩いていった

その間にも鳥型シャドウ【ヴィーナスイーグル】が無数の風の刃を放ち、次々と

敵シャドウを殲滅していく・・・弱いシャドウだったのか、いとも簡単に4体とも

消滅させると、くるりと少年と少女の方へ向いた瞬間に・・・屋上の扉が開かれた

「岳羽^{たけば}！無事か！？・・・見たこともないシャドウだ、注意しろ明彦^{アキヒコ}！」

赤いスカーフを胸に着け、また赤い長髪を携えた利発そうな少女が倒れているピンクの

服を着た少女へ呼びかけ、隣にいる銀色の髪をした少年・・・イズミが外で見かけた

少年が右腕に銀色の銃を持ちながら、倒れている2人の傍まで走り寄った

「ああ、分かっている！行くぞ！来いポリ・・・なっ！？逃げる気か！」

先程まで沈黙を続け、見つめるだけだった鳥型シャドウが屋上の扉から飛び出してきた

2人を見て、全速力でその場から飛び去った・・・後には安堵する3

人の少年、少女らと
銀色の髪をした少年だけが悔しそうに齒を噛み締めている姿だけが
残った

再びイズミは不気味な塔、タルタロスへと戻る為に、海を越えて人
工島へと目指していた
空を飛びながら、【ヴィーナスイーグル×3】達にご苦労様と言っ
てみるものの返事はなく

「やっぱり、この子達は喋れないのかなー・・・まあ、本能？で生き
る生物として見た方がいい
とイゴールが言ってたしねー・・・んー、でもあのまま遊んでも良か
ったんだけど・・・楽しみ？
は取っておいたほうがいいよねー戦力は減らしたくないし」

あははーと、楽しそうに笑いながら他人が戦う様を見るのもおもし
ろいものだねーと
考えながらも、飛び続けるイズミ・・・目を付けられた人物達にとっ
て幸いなのか不幸なのかは
・・・まだ分からない

4月9日 大型シャドウとの遭遇（後書き）

・この後どうしようかなあ・・・そろそろ現実世界へ出してあげたいけど

Lv10で出る・・・いや、でもここらへんで区切りつけないと・・・
？むむむ

っていうか、少年と少女だと分かりづらいからイズミに名前を知るイベント？

とか起こさないとなあ・・・むう・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0861v/>

ひねくれ者の寄り道 inペルソナ3

2011年8月20日00時24分発行